
仮面ライダー電王～外電2

D O N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王／外電2

【Nコード】

N1585H

【作者名】

DON

【あらすじ】

ブーツとの戦いが終わり
ようやく未来に向かう
良太郎達…

未来をかえる冒険が

今…始まる…

第二章…僕の未来…1（前書き）

シナリオ風の

会話式小説です

無許可で書いてます

誤字もあります

方言もまじりますが…

頭の中で変換して

読んでください

更新は不定期です

第一章…はこのサイトで書き終えています

原作のイメージを汚さぬように書きますので

気長に気楽に読んでください

第二章…僕の未来…1

僕は未来に向かってる…

僕がまだ見ぬ

未来を変えるために…

~~~~~

デンライナーの食堂車

~~~~~

良太郎

「…モモタロス
ところで…

未来の僕は
どんな人生を送って
来たのかなあ？」

モモタロス

「ん？

それはよお」

今の良太郎に
これからのおめえの

経験する事が

プラスされて
替わって
いくんだよ」

良太郎

「……………」

ウラタロス

「つまり」

未来は突然出来る
わけでもなく…

考え方や行動で
いくらでも変えられる
って事だよ」良太郎」

良太郎

「それって…
やっていい事？」

未来を知って
過去の行動を変えたら…

なんか…

ずるしてない？」

モモタロス

「良太郎〜！！」

カタイこと

言うんじゃないよ〜

ずるしてても

バレなきゃいいんだよ〜！！」

良太郎

「そんなあ…！！」

ウラタロス

「落ちつきなよ

良太郎〜

先輩の言い方は

乱暴だけど…

ある意味正解なんだよ

そりゃ〜

僕らだけが

出来る事だから…

ずるしてるように

見えるけど

例えば誰かに

『そんな事したら
将来苦労するよ!』

って注意をしたとして

その人が

『よし!やめよう』とか
『真面目に生きよう』

って思えば
違う人生をおくれるけど

『うるせー
お前の指図は
うけねえよ!』

って考え方を
変えない奴には
苦労する人生が
まっている

…それって
ずるしてる
わけじゃなく

彼が選択した未来

…だね

今回 良太郎は自分の
未来を見に行くけど

決めるのは良太郎で
僕たちじゃない

ただ良太郎が
行動を変えなきゃ…

未来は大変な事にな
るのは確実…

…だね

良太郎

「…どういうこと？」

未来の僕はそんなに
えらい人になってるの？

それとも…犯罪者？」

ウラタロス

「いや…

ただの普通のおじさん…

…だね

でも…

今のままじゃ…

…彼が生まれて来ない」

第二章…僕の未来…2

良太郎

「彼？ …誰？」

ウラタロス

「それは…」

まだ…秘密…だね

まあそのうち
わかる日がくるよ」

モモタロス

「いいか良太郎！！」

おめえの人生は
おめえが決めりや
いいんだけどよあ…」

人の話に耳をかす…
つてのも重要なんだぜえ…」

それとよあ…

真実は1つだ!!

そうすれば

路線をかえずに

突っ走る事が

出来るはずだあゝ」

良太郎

「路線をかえずに？」

つまり…

未来の僕は…

何かを選ばなきゃ

いけないきろに

立たされているって事？

そして…

その彼が

生まれてくるためには…

僕は…

他の人と

結婚しなくちゃ

いけないって事？」

ウラタロス

「まあ…早い話が…
そう言うこと…だね」

良太郎

「いいのかなあ…？」

ウラタロス

「大丈夫だよ…」

良太郎

本当の結婚相手は
元々 その娘
だったんだから…

でも理由は
はつきり

しないんだけど…

過去の時間が
いじられて…

その娘はかなり…
ヤバイことにな
ってるのは

確か…だね」

良太郎

「ヤバイこと？
それって…」

まさか…
イマジン…？」

ウラタロス

「たぶん…だね」

モモタロス

「いいか良太郎！
俺達が出る事は

イマジンを

やっつける事だけだ

言つとくが…

俺達は良太郎の
花嫁なんかにや
興味はねえんだぜえ

お前が誰と

結婚しようと

俺達には関係ねえ

誰が生まれて

こようが

興味もねえ！

まあゝ

俺達にイマジンの事は

まかせておきなあ！

良太郎は嫁さんを

助ける事だけを

考えてりやいいんだよ」

良太郎

「？ 助ける？

どういうこと？」

モモタロス

「お前の

未来の花嫁は

バレる事なんだからよゝ

かくしてても

しょうがねえじゃねえか！」

ウラタロス

「そりゃそうだけど…
いきなり自分の未来の
花嫁が犯罪者だなんて
言われたら…」

良太郎でなくても
気絶しちゃうでしょゝ

良太郎ゝしっかりして
良太郎ゝ！！」

良太郎
「う…

ここは…どこ…？ ？

…あ

…ウラタロス

…

… おやすみ… なさい」

ウラタロス

「ちよつと」！

良太郎！

ちゃんと起きて！

良太郎の未来の花嫁に
会いに行くんだよ！！」

第二章…僕の未来…3

良太郎

「…あつ そうだ!!」

モモタロス

どういうこと?

僕の奥さんになる人が
犯罪者?

しかも…5つも

犯罪を犯してるの?

それって…

…事件が1つなら
イマジンの仕業かも
しれないけど…

5つも犯罪を
犯してるのなら…

絶対…悪い人だと
思うよ…

そんな人と僕は結婚…」

バシッ

キンタロス

「良太郎！

それ以上

しゃべるんやない！！」

良太郎

「キンタロス！

いきなり殴るなんて！！」

キンタロス

「ええか良太郎！！

その娘が本当に
悪事を働いたかどうか

まだ お前の目で

確かめたわけや

無いやろ！！

自分の目で確認も
してないのに

人のウワサや

結果だけで

判断するのは
感心できんなあゝ

オレらが見た
その子はなあゝ

決して…

そんな悪事を
働くような

悪い奴には見えん!!

(コキッ)

…でないと

オレらが良太郎を

過去にまで迎えに来て

未来を変えようとは

せんで!!」

(コキッ)

良太郎

「キントロス…

…ごめん

…そうだよね

まだ僕の目で

確かめてないし…

みんなが心配して

来てくれたって事は…

きっと…

真実は違うんだと

思うよ…

ごめんね…

キンタロス…

…僕が間違ってたよ」

キンタロス

「かまへん かまへん

誰でも間違いは

おこすもんや

わかったらそれでええ！」

良太郎

「でも…」

どうすればいいんだろ？

そうだ…！

事件の起きる前に行って

事件を起きなくすれば
いいんだよね？」

ウラタロス

「そう…だね
でもその前に…」

彼女に会って
事件のあった
日と時間を
調べなきゃ…」

良太郎

「どうやって？」

ウラタロス

「…もちろん刑務所に

行くんだよ

今〱彼女に会えるのは
家族か弁護士だけなんだ…」

良太郎

「…家族は無理だから
弁護士？大丈夫かなあ？」

ウラタロス

「大丈夫だよ良太郎〱

ほら このバッチ

良太郎

「え？盗んだの？
作ったの？？」

ウラタロス

「違ふよ〱

ちゃんと勉強して
とったんだよ〱

良太郎が…」

良太郎

「え？僕が…弁護士？
ありえないよ…」

…だって

弁護士になるには
そうとう勉強しなくちゃ
ならないんだよ？

そんなの無理だよ…」

ウラタロス

「でもほら

これはまぎれもない

良太郎の本当の

弁護士資格証明書だよ

もちろん

未来の良太郎が
とっただけだね

自分の未来の花嫁を
助けるために…

未来の良太郎は
がんばったんだよ

愛の力…だね！！

…まあ

僕もほんの少し

お手伝いしたけどね…」

第二章…僕の未来…4

良太郎

「お…お手伝いって…」

なんか…

それが一番心配だね…」

ウラタロス

「…ん？

なんか言った？

良太郎？」

良太郎

「いや…

特には…

じ…じゃ…

さっそく

その人に会いに行こう…！」

モモタロス

「あせるなよ！！」

良太郎

刑務所に行く前に

片付けなきゃいけねえ

事があるだよ」

良太郎

「…どこにいくの？？」

ウラタロス

「まあまあ」

良太郎

すぐ終わる事だから…

じゃ

このスーツに

着替えてみようかあ」

キンタロス

「まてまてえ」
こんな時には

羽織ハカマと昔っから
決まっとる！！

これを着ていたら
間違いない！！」

（コキッ）

ウラタロス

「キンちゃん
ある意味そうかも
知れないけど」

今回はスーツで」

キンタロス

「いや！！紋付き袴や！！

間違いない！！」

ウラタロス

「スーツだつてばあゝ
僕が憑くんだからゝ」

キンタロス

「なんでや!?!」

「ここはオレの出番や!
ゝ間違い無い!!」

ウラタロス

「いやゝ僕が」

キンタロス

「いや!俺の!!」

良太郎

「まつゝ待つてよ
2人ともゝ」

何もめてるの?

何?何が始まるの?」

キンタロス

「決まっとるやないか！

良太郎の

お見合いや!!」

(コキツ)

良太郎

「え？え？え？…

…なんで？

？まだ彼女は
刑務所にいるんだよね？

お見合いって…

まだ… 気が早くない？」

モモタロス

「良太郎」

お前が落ち着けよ！

お前と彼女は
恋愛で結婚するん
だろうが

今から行くのは
お見合いなんだよ!!」

良太郎

「え?」

だれの?」

「僕」

モモタロス

「そつだよ!

お前は今から

お見合い会場に行つて

そのお見合いを
ぶち壊しに行くんだよ!

でなきゃお前は

そのお見合いの
姉ちゃんと
結婚しちまうんだよ」

良太郎

「え？
…」

あ…

そうなんだ…？

じゃー止めなきゃ
…

？でも…

なんで…？

なんで僕はお見合い

するの？

そんなに…

モテないの？」

モモ・ウラ・キン

「うん!!」

良太郎

「…そ　そんな

そんなに声合わせて

言わなくても…

き…傷つくよ…僕…」

モモタロス

「落ち込むなよ

良太郎」

だだ…

ちよつとばかり

運命の人に

巡り会わなかった…

っただけだよぉ」

良太郎の

運の悪さには

誰もかなわねえよ」

良太郎

「…モモタロス

…なぐさめに
なつてないよ…」

第二章…僕のお見合い…1

モモタロス

「え？そうなの？

ま…まあいいじゃねえか

カタいこと抜きにして…

…気にすんなよ…

良太郎…

お前には明るい未来が
待ってんだからよ…

さあて…

とつとと見合いを
壊しに…

行くぜ！

行くぜ！！

行くぜ…！！！！」

~~~~~

お見合い会場

~~~~~

ホテルのレストラン

愛理さんは着物

桜井侑斗（謎の方）が
座ってる

向こう側には

新聞社の尾崎さん

見合い相手

女性の両親が座っている

愛理

「おそいわねえ…

良ちゃん…

また迷子に

なってるのかしら…」

尾崎

「大丈夫ですよ」

愛理さん

まだ始まって

40分ぐらいですから」

愛理

「ごめんなさいね…」

ちよつと携帯かけて
みますね…」

ピッピッ…

~~~~~

エレベーターホール

~~~~~

良太郎の携帯が鳴る

（姉さんだよ〜姉さんだよ〜）

良太郎

「わっ姉さんからだ…」

どうしようモモタロス？」

モモタロス

「どうしようったって

出りゃいいだろうが〜！

お前の姉ちゃん
なんだからよ〜」

良太郎

「…そうだよね

…

もしもし…姉さん？

…ごめん…もうすぐ
つくんだけど…

…え？…40分も？…

え〜？どうしよう？

す…すぐいくから
急いで行くから〜！

じゃ…

(ピッ)

モモタロス大変だ！！

お見合いもう
始まってるよ〜

40分も待たせて
るんだって…

急ごうモモタロス!!

…って

何やってるの
さっきから？
」

モモタロス

「何って?!

決まってんじゃねえか!!

良太郎が来るのを待ってんだよ!!」

良太郎

「え…?

僕なら…

ここにいますよ?」

モモタロス

「おめえの良太郎じゃ
ねえよ!!」

未来の良太郎が
来るのを待ってんだよ!!

見合い会場で

良太郎が2人もいたら
大変だろうが!!」

良太郎

「あ…なるほど」

モモタロス

「あ…なるほど

じゃねえぞ良太郎!!

ちいつとは頭使えよ!!

…全く!!

…で!!

何でこねえんだよ!!

こっちの良太郎は!?!」

良太郎

「…寝坊かな？」

モモタロス

「…良太郎…！！」

今から早起き

練習しとけ…！！

わかったか…！！」

良太郎

「…ごめん…」

れ…練習しま…す

…でも

どうしたんだろ？

道に迷ったのかなあ？

…あ？

…携帯ならしてみようか？」

モモタロス

「…おお

良太郎が出たら
かわれ！！

文句言つてやる！！」

良太郎

「…うん

…わかった

…あれ…？」

ウラタロス

「無駄だよ…良太郎」

第二章…僕のお見合い…2

良太郎

「ウラタロス…

…そうだよね

この僕の携帯で…

未来の僕の携帯に
かけようとしても

同じ番号だから…

かからないよね？」

ウラタロス

「そう…その通り
…だね」

良太郎

「でも…

今…姉さんから

電話があつたし…

この番号は未来でも
使われてるんだよね…

未来の僕が先に
出なくて良かったよ…

出たら…」

ウラタロス

「出ないよ」

こんな事もあるうかと…

未来の良太郎の携帯に
ちよつと細工をしてね

携帯を使えなくして
おいたんだよ

それと 未来の良太郎に…

モテないのは
電話番号の

せいじゃないか？

って言つてあげたら…

ちょうど携帯も
こわれたし

新しい番号に
変えるって…

今頃は携帯ショップに
いるんじゃないのかなあ

…お見合いに
遅刻しているのは
そのため…だね」

モモタロス
「カメ」

やるじゃねえか

……でもよ

お見合いがあるのは
知ってんだろ？

来るの遅くねえか？」

良太郎

「そうだよね…」

心配だなあ…

…どの機種に
したんだろう？」

モモタロス

「良太郎…！！」

てめえの心配は
そっちかよ！！」

良太郎

「だって…」

大切な事だよ」

…未来の携帯電話か」

どんな機能が
ついてるのかなあ？

…色とか」

…形とかも大事だし」

ウラタロス

「……はいはい

良太郎はそんな事

気にしなくても

いいんだよ」

良太郎には

高性能の僕たちが

憑いているんだから」

そんな事より

まずはお見合い

お見合い……」

キンタロス

「よっしゃっ！

ほなあゝいこか！！」

良太郎

「え？」

~~~~~  
お見合い会場

尾崎

「あゝ!!!!!!」

良太郎君が

良太郎君来ましたよゝ

…え？」

K 良太郎

「すまん!! すまん!!」

ちよつと電車が

混んでてなあゝ

遅れてしもたゝ!!

すまん!!」

尾崎

「……電車が？」

あ…

いいんだよ

いいんだよ

ささ

みなさん

お待ちかねだから

早く

早く席について…」

愛理

「も　良ちゃんたら…

でも

事故じゃなくて

よかったわ

あれ？　良ちゃん？

若くなつてない？」

K 良太郎

「そ… そ… そうか？

き… 気のせいやろ？

… ああ！

きつと着物のせいやろ！

孫にも衣装つて

やつやなあゝ ！！

黄色いエクステも

つけとるさかいなあゝ

若こつ見えるんや

間違いない！！

（コキッ）

《キンタロス…

… 孫じゃなくて

馬子だよ…》

… ん？

ホンマか？何でや？」

愛理

「も」

「良ちゃんたら」

尾崎

「え」

「それでは みなさん  
おそろいに  
なりましたので」

「まずは自己紹介を  
させていただきます」

## 第二章…僕のお見合い…3

尾崎

「こちらは

野上良太郎君

彼はご両親を

小さい時に

亡くされてますので

今日は

お姉さんの

桜井愛理さんと

旦那さんの侑斗さんに

御同席して

いただきましたあゝ」

愛理

「よろしく

お願いします」

尾崎

「はい

で

こちらが…

尾崎ひろ子さんと  
ご両親です

ひろ子さんは

僕の姪にあたる  
人なので

良太郎君と  
結婚すれば

僕と愛理さんは  
親戚同然の間柄…

いや

めでたいですよねぇ  
愛理さん」

愛理

「……そうですね…」

尾崎

「そおだ  
まず」

ひろ子さんから

良太郎君に

質問があれば、

何か聞いてみたら？」

ひろ子

「あの…

…ご趣味は？

仕事のお休みの日は  
何をされてますか？」

K 良太郎

「趣味は空手！

休みの日は…

山に登って

自然とたわむれとる」

ひろ子

「山に？ 登山が

好きなんですか？

ワンダーフォーゲル部

ですか？」

K 良太郎

「……？」

ワンコが吠えるブウ？

ちがう！ちがう！！

犬はワンて吠えるんや

そんなことも

しらんのかいなあ

《キンタロス……

ちよつと違うけど……

嫌われるなら

それもいいかも……》

オレは

山におる動物たちと  
稽古しとるんや」

ひろ子

「動物…？」

…稽古？」

K 良太郎

「そや！！」

クマやイノシシたちと  
丸い円の中で  
空手の稽古や！！

その後

滝にうたれて  
汗をながすのは  
気持ちがあええで～

間違いない！！

どや…

ねえちゃんも

一緒にしてみるか？」

ひろ子

「…ねえちゃん？」

…いえ

私は…遠慮します」

K 良太郎

「そうか」

残念やなあ」

気が合わんなあ」

尾崎

「り…良太郎君」

ひろ子

「でも…

私は観るだけですが…

格闘術には

すごくひかれるんです

空手をされているんですか？

すごいですね

私は格闘のTVや

試合もよく見に行くんですよ…

でも…

私の友達は

興味が無いみたいで…

誰も一緒に行つて

くれなくて…

あの…

良かったら今度

一緒に試合を

見に行きませんか？」

K 良太郎

「試合…？」

…まあ弱い奴らの試合

見に行くのも

アホらしいが…」

ひろ子

「あなたのような

たくましい人が

いてくれたら…

私とつゝても

安心できると思つんです」

K 良太郎

「たくましい…？」

安心…？

…

決まっとるやないか  
オレの強さに

勝てる奴はおらん…！

試合であろうが  
何であろうが

お前を守るぐらい  
屁でもない…！

安心してオレに  
まかせとけ…！

オレの強さは  
泣けるで…！！

《…あれ…？》  
「」

ひろ子

「ほんとですか？」

## 第二章…僕のお見合い…4

K 良太郎

「当たり前やないか！！」

男に二言はない！！

このオレに

まかせとけ！！

お前を一生守つたる！

間違いない！！」

ひろ子

「ありがとうございます！！」

尾崎

「良太郎君」

見直したよキミ」

じゃー良太郎君も  
ひろ子さんの事が  
気にいったんだね」

K 良太郎

「……………」

愛理

「良ちゃん」

おめでとう」

K 良太郎

「…ん…」

…何でや？

《キントロス》

何で！一生

守っちゃうの？

それじゃ結婚  
しますって

言ってるのと  
同じだよ！！》

何！！ホンマか？

いやゝすまん

勢いやがな勢いゝ

《バカクマゝ！！！

勢いですむかよ！！！

もういい！！

俺様とかわれゝ！！！！》  
「

尾崎

「いやゝ

こんなに早く

まとまるなんてゝ

じゃ早速結婚式…」

M良太郎

「ちよつと待ったゝ！！

今のは却下だゝ！！」

尾崎

「き…却下？」

M 良太郎

「ああゝ！

却下だゝ！却下！！

だいたいよ！

試合なんて

見るもんじゃねえしよゝ

こちら

いそがしくて

デートなんかしてるま  
ねえんだよ！！」

ひろ子

「そうですか…

残念だなあ…

せっかくお弁当作って  
行こうと思ったのに…」

M 良太郎

「お…お弁当？」

ひろ子

「はい…

私ゝ料理は

得意なんですよ

パンやクッキーや

プリンも美味しく

作れますよゝ」

M 良太郎

「プリンゝ!!!!!!」

ひろ子

「良太郎さんは

プリン

好きなんですか？」

M 良太郎

「はい！」

ひろ子

「じゃゝ今度  
たくさん作りますね」

M良太郎  
「はゝい！」

《先輩》  
「はゝい！  
じゃないでしょゝ

ちよつと  
変わろうか！《」

ひろ子  
「他に欲しいものが  
あれば作りますよ」

U良太郎  
「欲しいもの？

愛かな…」

ひろ子

「…え？

はい！！

がんばります！」

U 良太郎

「え？

あ…！

じ…じゃなくて…

ひろ子さん

だったかなあ…

キミ…

料理が得意だつて？

魚は3枚に

おろせる…かな？

《ボクもやりた〜い》  
「

ひろ子

「はい もちろん！」

R 良太郎

「答えは聞いてない！！

《小僧！てめえは

それが言いたい

だけだろが！

こうなったら

みんなでかわれ》」

ひろ子

「え？

じゃ

良太郎さんの

好きなものは？」

M 良太郎

「ケンカ」

U 良太郎

「釣り…だね」

K 良太郎

「昼寝」

R 良太郎

「子猫」

「暴力」

「おか釣り」

「冬眠」

「シャボン玉」

「降臨！」

「必殺技」

「夜遊び」

「熟睡」

「お姉ちゃん」

## 第二章…僕のお見合い…5

全員

「……………」

良太郎

「ちよつと…！」

ちよつと待つてよ  
みんな…！」

愛理

「良ちゃん…」

どうしたの？  
みんな…つて？」

良太郎

「え？ いや…」

ちよつとごめんなさい

僕…トイレに…」

ひろ子

「大丈夫ですか？」

愛理

「きつと…」

大丈夫ですよ

良ちゃんは…

時々ああなるんです」

トイレ

良太郎

「ちよつと〜！

みんな出て〜！」

〜

〜

〜

〜

モモタロス

「どうしたんだよ

良太郎「？」

良太郎

「どうしたも  
こうしたもないよ」

あんなにはげしく  
憑依したら……  
僕の体がもたないよ」

モモタロス

「……そうか？」

……でもよ良太郎」

……

ここせまくねえか？」

良太郎

「……あ

ごめん……つい」

モモタロス

「ついじゃねえよ!!」

キンタロス

「そんな事より…  
なんや…」

ジークもおったような?」

ウラタロス

「…だよね?」

モモタロス

「なに!」

あの手羽先野郎!

…どこだ!!

トリ野郎!

出てきやがれ!!」

ジーク

「降臨！滴を持して」

モモタロス

「てめえ」！

いちいちハネ

まくんじゃねえ！！

それに何で上から

見下ろしてんだよ！！

てめえ、降りてこい！！」

ウラタロス

「先輩」

これ以上

無理だつて」

モモタロス

「そ、それも

そうだなあ」

…てか

ハナタレ小僧！  
さっさと鍵開けて  
こっから出る！！」

リュウタロス  
「え？もういいの？  
は〜い」

モモタロス  
「アア〜！！  
すっとしたぜえ〜

便所で  
てんこ盛り  
するとは  
思わなかったぜ！」

キンタロス  
「終わったらこれで  
拭いとけ！！」

パラパラパラ〜

バシッ

モモタロス

「クマ」

かい紙をトイレに  
まくんじゃねえ！

…で

どおすんだよ良太郎

このままじゃ

破談にはならねえ  
気がするぜ…」

良太郎

「…だよね

結構…話が合うし…

美人だし

いい子だと思うよ…

…でも なんて  
あの子じゃ

ダメなんだろう？

あの子でも…

幸せになれるような  
気がするし…

僕の未来は

変わるかも

しないけど…

この未来も

いい未来になる

気がするんだけど…

あの子を選んじゃ

なぜだめなのかなあ？」

モモタロス

「…良太郎」

ウラタロス

「良太郎」

ダメなものは

ダメなんだよ」

まあ…良太郎さえ

よければ… けどね

いいんだよ

奥さんは

美人ホステスになり

子供は5人…

そして子供は

誰も良太郎には

似ていない…

良太郎は

本当は家事の出来ない

奥さんの代わりに

主夫になる…

そんな覚悟が

あるのなら…

…このままでも

…いいけれど」

## 第二章…決断…1

良太郎

「それは…  
ちよつと…

イヤかも…

でも…

その未来も  
僕しだいで  
変わるんだよね？

奥さんが  
働かなくても  
いいように  
僕がバリバリ働いて…」

ウラタロス

「バリバリ働いて…  
奥さんのために  
残業しまくって…

お金持ちには  
なっただけ…

夫婦の溝は広がり…  
心のすき間を  
埋めるために

奥さんはホストに  
はまり…

良太郎は無理が  
たたって体を壊し

リストラされて…

家計をささえるために  
変わりに奥さんが  
ホステスになり…

良太郎が主夫に  
なったん…だね」

良太郎

「…そんなあ  
じゃ…普通に働けば…」

ウラタロス

「共働きをして…」

外に彼氏が出来て…

同じ…だね

元々…彼女には

好きな彼氏が

いたみたいでさあゝ

だから…

このお見合いは

破談にすべきなんだよ」

良太郎

「…そうなんだ

それなら…

しかたがないね…

…

よし…！

このお見合いは

…僕から断るよ」

モモタロス

「だよなあ」

そのほうが

良太郎のためにも  
いいと思うぜ！」

キンタロス

「良太郎！！」

男はあきらめも

肝心や！！

間違い無い！！」

（コキッ）

リュウタロス

「イエイ」

良太郎」

がんばれ！」

良太郎

「……じゃ

みんな行くよ！」

モモ・ウラ・

キン・リュウ

「オ……！」

）

）

）

良太郎に憑依して  
みんなトイレを  
出ていく

ジーク

「み……みなの方？」

あ……あるじを……

降ろせえ……」

）  
）  
）  
）  
）  
）

お見合い会場

~~~~~

テーブルの前に
一人の男性が
立っている

良太郎

「どうしたの？
…姉さん？」

愛理

「…良ちゃん
実はね…

この人は
ひろ子さんの
彼氏らしいの…」

尾崎

「良太郎君！！
申し訳無い！！

…僕はお父さんから
ひろ子さんの
お見合い相手を

探してくれと
言われただけで…

詳しいことは
聞いてなくて…」

父親

「申し訳無い！！

…実は

娘が…

どこの馬の骨か
わからん男と
付き合っていると

妻から聞いて
おりまして…

そんな男と
付き合わせる
ぐらいなら

いつそ…

お見合いでもさせて
しまおうかと…

娘にも散々

言い聞かせて…

もう彼の事は
あきらめたと
思っていたのですが…」

愛理

「ひろ子さんが…
彼氏にお見合いの事を
話していたらしくて…

きっと…

彼の本当の気持ちを
確かめたかった…

じゃないのかなあ…？」

ひろ子

「…ごめんなさい」

第二章…決断…2

父親

「私も…彼と会つのは
初めてでして…

名前も…

仕事も知らなくて…

今…

知ったのですが…

彼は私の会社の…
取引先の息子さん
だったんです

…だからと言って
許す訳じゃ
無いのですが…

娘の事を…

真剣に愛していて
くれているようで…

親としては…

その気持ちに答えて
あげたほうが…

いいような気が
しまして…

良太郎さんには
申し訳無いのですが…

どうか…

どうか！！

この話は
無かった事に
していただきたい…！！」

良太郎
「…そうですか」

男性
「申し訳無ありません
突然押しかけてしまって…

もつと早く僕が

ご両親に会っていたら…

こんな事には

ならなかったのに…

あなたにも

大変イヤな

思いをさせて
しまいました

申しわけありません」

良太郎

「イヤ…

僕は大丈夫ですよ
全然…

気にしてませんから…

それよりも

彼女を大切にして

あげて下さい

…それと

カラダには

気をつけて…

働き過ぎは…

良くないですから…

どうか…

ひろ子さんと

お幸せになって下さい」

男性

「ありがとうございます」

愛理

「いいの？

良ちゃん…」

良太郎

「いいんだよ

姉さん…

こうなる気が
してたし…

僕の花嫁は…

僕が見つけるから

気にしないで…

じゃ…

僕は…

これで失礼します」

尾崎

「ごめんね」

良太郎君」！」

~~~~~  
デンライナーの中  
~~~~~

モモタロス

「落ち込むなよ

良太郎」！」

良太郎

「別に…落ち込んで
ないよ…

でもこれで…

僕の未来は

変わったんだよね？」

ウラタロス

「まあ」

主夫になる未来は

消滅した…

って事だよな」

でも…

やっかいなのは

これから…だね」

良太郎

「そうだよな…

これから刑務所に

行って…

…？

行ったら

簡単に会えるの？」

ウラタロス

「いや…
とりあえず

彼女の事件を
担当している
弁護士事務所に
行って…

担当を変わって
もらえば…
いいだけ…だね」

良太郎
「そんな簡単に
出来るの？」

ウラタロス
「良太郎…
まあ…
大漁船に
乗ったつもりで…

僕に任せて
欲しいなあ…」

良太郎

「…………はい」

モモタロス

「カメと良太郎

だけで行くのかよ？」

ウラタロス

「……だね

もちろん

先輩達にも

ちゃんとし

手伝ってもらおうよ」

さてと

じゃー

そろそろ行くところか？

良太郎……」

第二章…決断…3

（ （ （ （ （ （ （ （
弁護士事務所ビル
（ （ （ （ （ （ （ （

U 良太郎

「ここ…だね」

警備員

「あの…？
どちらに？」

U 良太郎

「芝山法律事務所に」

警備員

「そうですか
では…」

4階にありますので
どうぞ」

（ （ （ （ （ （ （ （
芝山法律事務所

U 良太郎

「すみません

芝山弁護士は
いらっしゃいますか？」

遠藤

「いるよ

おたくは？」

U 良太郎

「野上：良太郎

先生の将来有望な
右腕が来たと：
お伝え下さい」

遠藤

「はあ？

…何言つてんの？

ふざけた野郎だなあゝ

仕事の依頼

じゃなかったら

帰ってくれる

先生は忙しいんだよ！

お前みたいなの

すかしたヤツと

会つてるヒマ

無いんだよ！

さっさと帰れ！

はい！ドアはあっち！

さあゝ帰った帰った！」

U良太郎

「ちよつと…

乱暴だなあゝ

僕は…美鈴さんからの
メッセージも預かって
るんですけどゝ

本当に帰っても…
いいのかなあ」

遠藤

「誰だよ？

美鈴？

どうせどつかの
キヤバ嬢だろ？」

U良太郎

「失礼だねキミは

美鈴さんは…

旧姓は確か…

中村さん…だね」

芝山

「遠藤！！

その方を

こちらに…」

遠藤

「えゝ？

いいんですか？

じゃ…

じゃゝあちらに」

U 良太郎

「よかつたゝ

じゃゝね

ぼくちゃん」

遠藤

「ぼ…ぼくちゃん？」

芝山

「どうも

弁護士の芝山です

で…

キミ誰？彼女と

どういう関係？」

U 良太郎

「どうも

はじめまして

野上良太郎と申します

先生の事は

いつもTVで

拝見しております

こんな有名な

先生の下で

働けるなんて…

僕はなんて幸せ者だと…

感激しております」

芝山

「え…？

下で？働く？

あ…！

下の階に

引っ越して来た人？

よろしく

…で彼女はなんて？」

U 良太郎

「違いますよ」

この事務所で

先生の下で働く

弁護士の

野上良太郎です」

芝山

「え…？」

何それ？

やとつてないよ？」

U 良太郎

「え…？」

…まさか」

…ひょっとして

まだ手紙を
ごらんになつて
ないのでは？」

芝山

「手紙？」

何の？

誰から！？

美鈴から？」

U良太郎

「違いますよ」

ほら

前の事務所の

上司の………」

芝山

「上司？」

牛丸部長？」

U 良太郎

「そうそう

その牛丸部長さん…

…から

手紙が届いている

はずですが…？」

3日ぐらい前に…」

第二章…決断…4

芝山

「3日前？

いや…

見てないぞ

おい！遠藤

牛丸さんから

手紙きてないか？」

遠藤

「きてないっすよ」

いつも郵便と新聞は
その机の上と

古いのはこっちの
棚に…

…あれ？

未開封の手紙だ…

芝山さん

ありましたよ

はい

新聞のたばに
はさまってました」

U 良太郎

「なにやっぺんだか…」

遠藤

「ん！？なに？」

芝山

「いいから…！
小さいのあつちに
行つてろ！

…牛丸さんからだ

なになに…

『野上良太郎という
青年をしばらく
そちらに預けます

見た目は若いが
優秀な人材なので
そく戦力になるはずす

もちろん彼に
支払う給料はこちらで
負担するので
安心してください
』

…何が目的だ？

…つますぎる話だなあ

…本当の目的はなんだ？

お前…何者だ？」

U良太郎

「何者と言われても…
通りすがりの…

なんとか…でもないし…

僕は純粹に

仕事がしたいだけ

…だね

…と

言っても芝山先生は
全部お見通し…だね

隠しておいても
どうせバレる

バレちゃくしょうがない

先生にすべて
お話いたします

《え？ウラタロス…
言ってもいいの？》

実は僕…

未来の…

芝山先生になりたくて…

同じ弁護士を
するなら…

どうせなら

先生のそばで
勉強したほうが…

手っ取り早く
TVに出たり〜

先生のように
なれると思ひまして

牛丸さんと親しい
叔父に頼んで
推薦状を書いて
もらっただんです〜

もちろん弁護士経験も
豊富にありますか…

僕には先生のような
華がない…

こればかりは
近くにいないと
勉強にはならないと…」

芝山

「…フン！

どうせ〜

そんな事だろうと
思ってたがなあ…

言つとくが…

ウチにくる依頼は
ややっこしい

モノばかりだぞー！

どうだ？

これなんか

担当してみるか？」

U良太郎

「大企業の脱税…？」

ありがたいのですが…

こんなチンケなモノより

…出来れば

そう

殺人鬼…

なんてモノがあれば

僕の腕前を
披露する事が
出来るんですがねえ」

芝山

「殺人鬼？
…そんな

あ…

遠藤が担当している
モノの中に確か…

5つの犯罪を犯した
女性の事件が
あったはずだ…

それを担当してみるか？」

遠藤

「ち…ちよつと
待って下さいよう

あれは僕が
担当してて
やっとな…」

芝山

「うるさいよ！
チビ！

ここは俺の事務所だ！
誰が担当するかは
俺が決定する！

良太郎！
この件はお前が
担当しろ！」

第二章…事件簿…1

U良太郎

「ありがとう

ございまあゝす

じゃゝさつそく

依頼人に

接見してきます

そうそう…

帰りは遅くなるので

僕はそのまま

お家に帰ります

…だから

戸締まりよろしくね

…ぼくちゃん」

遠藤

「ぼくちゃんって

呼ぶなあ！！

俺にはちゃんと

賢司って名前が

あるんだよ!!」

U 良太郎

「…だね

前の会社で

オレはケンジだ…って

合コンで言ってた

らしいね」

検事のふりして…」

遠藤

「な…何で知ってたんだよ!!」

U 良太郎

「そんなエサじゃ」

女の子は…

釣れないよ」

じゃああとよろしく」

遠藤

「し…芝山さん
何であいつ…」

俺たちの事

あんなに

知ってるんすかねえ？」

芝山

「DVD見たんだろ…」

~~~~~  
デンライナー  
~~~~~

ウラタロス

「さあて」

どれどれ？

なんだ？この資料は
こんなんじゃない？」

やっぱり本人に直接
会わないと

何もわからないなあ」

モモタロス

「ケツ！」

人間のデカの仕事
なんて所詮
そんなもんだよ

まあ俺様が
デカになつたら
世界は変わる
だろうけどよお

キンタロス

「まあ」

心配せんでも
モモのじは
採用試験に
落ちる

漢字知らんし
泳がれへんし

絶対落ちる！

間違いない！」

（コキッ）

モモタロス

「言いたいこと
言ってくれる

じゃねえかクマ公！

俺様だつて

漢字ぐらい

書けるんだぜ！

オレ！サンジヨウとかよ」

キンタロス

「ほおほほな

書いてみい」

モモタロス

「みてるよ」

「……」

ほらよ」！

キンタロス

「……なんやこれ？

『俺』は
おおとるけど…

俺の上のスミに
書いた
3てなんや？」

リュウタロス
「モモタロス…
バカじゃないの…？」

モモタロス
「…え？
…ちがつた？」

キンタロス
「アホやなあ」

（コキッ）

良太郎

「ウラタロス…
1つ聞いていい？」

牛丸さんとは
いつ会ったの？」

ウラタロス

「牛丸？」

だれ…？」

…ああ」

前の会社の上司ね」

会ったことないよ…」

良太郎

「…え？」

でも…手紙が…

あれは？」

どうやったの？」

ウラタロス

「…あゝ」

あれは簡単だよ

リュウタが

書いたんだよ

このペンに

仕込んだ

マイクで名前を

聞いて…

リュウタが牛丸さんに

なりすまし

手紙を書いてゝ

デンライナーで

過去に戻り

3日前に事務所に

届くように

ポストに出したん…だね」

良太郎

「なるほど」

第二章…事件簿…2

ウラタロス

「そろそろ…」

目的地…だね

いくよ 良太郎」

良太郎

「うん」

モモタロス

「ちよつとまつた〜！

よお〜カメ公

そろそろ〜俺様にも

代われよ！

てめえ〜ばっかり

良太郎を占領

するんじゃない〜！！」

キンタロス

「せやなあ」

出番が無いのは」

泣けるで!」

(コキツ)

リュウタロス

「そうだそうだが」

ボクだって

やりたいのに」

良太郎に憑いても
いいよね?

答えは聞かないけど」

ウラタロス

「待つてよリュウタ」

みんなも落ち着いて」

警察に行くんだから」

僕の方が経験あるしゝ

先輩は昔ゝ

失敗してるしゝ

ここは僕に

まかせてほしいなゝ

もちろん事件の起きた
時間がわかれば

みんなにも

ちゃんとカードを

渡すからさあゝ

なにせ 5つも事件が
あるんだからゝ

1人1回は必ず出番は
あるよゝ

モモタロス

「俺たち4人で

5枚ならゝ

1枚あまるぜゝ

どうすんだあ？」

ウラタロス

「そりゃゝもちろん

良太郎が独りでやるんだよ

やっぱり自分の

お嫁さんは

自分で守らないとね」

良太郎

「…え？

…そっか

そうだよね

イマジンと

戦うわけじゃないし…

わかった！

僕もがんばってみるよ」

モモタロス

「だよなあゝ

てめえの花嫁を守れねえ

旦那なんて

結婚してる意味ねえしよ

良太郎

一発バシッと

決めてこい！

良太郎

「うん

がんばってみるよ」

ウラタロス

「じゃ

行くよ良太郎」

「

」

「

」

」

良太郎

「じゃね」

取り調べ室

U良太郎

「はじめまして

僕は芝山弁護士事務所の
野上良太郎と申します

今日から僕があなたを
弁護しますので
よろしくね」

かなえ

「……………」

U良太郎

「……うっ

……無視？」

かなえ

「……………」

U良太郎

「…さて」

実は今日

僕がやってきたのは
他でもありません

あなたが犯した殺人や
窃盗など…

すべてが…

無かったことに
なるかもしれないって
話を持ってきました」

……………」

かなえ

「……………」

U 良太郎

「あれ？」

…反応なし？

…あのくかなえさん？

小田かなえさん？

話…聞いてます？」

かなえ

「……………いま……………」

U 良太郎

「え？」

ごめんなさい

聞き取れなくて」

かなえ

「いまさら…」

…そんなこと

言われたって…

亡くなった方は…
生き返る訳じゃないし…

私は…このまま
死刑でもかまいません」

第二章…事件簿 3

U良太郎

「…なるほど

お気持ちは

よくわかります…が

でも…それが

それがもし

第三者のしくんだ

ワナだとしたら…

あなたは…

どうしますか？

このまま

犯罪者の汚名を

かぶったまま

…死刑になる？」

かなえ

「…第三者？」

…そんな事
有り得ないし…

たとえ第三者が
いたとしても…

私が車でひいた事には
かわりがないし…

あの感触は一生
消えることは
無いと思うし…

私がどんな罰を
受けても

私がどんなに
あちらのご家族に
謝ったとしても…

あの人は
生き返らない…

…そうでしょ？」

U 良太郎
「…だね

《…だねって》

かなえさん

あなたの気持ちは

海よりも深く

わかります

でもね…

あなたにも未来がある

あなたを産んだ両親や

今まだ

めぐり逢えて
ないであろう

未来の彼氏や…

そして2人がめでたく
結婚し…

かわいい赤ちゃんが
産まれて…

さらに未来に
生まれてくる

子孫のためにも

あなたは罪人のまま
あんなロープに…

釣られてはいけない…

せめて事件の
真相だけでも
未来に残さなくては
ならない

これは
あなたの使命…

…だね」

かなえ
「…両親には
申し訳ない気持ちは
あるけど…

未来の彼氏とかは…
関係なくないですか？」

「
U 良太郎

…だね

《…だねって

ウラタロスゝ

早く彼女に

カードをあてて

時間を確認したほうが
いいと思うよ》

…だね
」

かなえ

「…？

どうかしました？」

U良太郎

「いやいやゝ

それはそうと…

僕がこの資料を

見て感じたんだけどゝ

この証言に

矛盾を感じてねえ」

出来れば」

事件の事を

キミの口から

直接聞きたくて

つらい思いを

させるかも

知れないけれど

もいちど…

僕に話して欲しいな」

かなえ

「話すのはいいけど…

手は離してください」

U 良太郎

「あ」

ごめんなさい

つい…

いつものクセで…

さてと…

じゃゝまず

自動車の事故の件から

資料によると…

あゝ

資料はあてに
ならないか…

僕は…キミの

その唇が
かなでる言葉の
すべてを信じるよ

だから…

何もかざらず

ありのままを

僕に…

話して欲しいな…」

かなえ

「…だから

手はにぎらないで
ください…」

U 良太郎

「…失礼

職業病… だね」

かなえ

「……………」

U 良太郎

「……」

…ごめん

話を続けて」

第二章…事件簿…4

かなえ

「あれは…

仕事で花を

配達している

途中の事故でした…

曲がり角で

急に男の人が

飛び出してきて…

よけきれずに…

細い路地の曲がり角で

そんなにスピードは

出てなかったんだけど…

タイヤの下敷きになり…

…即死でした

一緒にいた奥さんが…

全てを目撃してて…」

U良太郎

「なるほど…」

… ちよつと失礼」

かなえ

「…？」

何ですか？

そのカード」

U良太郎

「いや」

気にしなくていいよ」

まあ…

捜査資料…だね

… 今のところ

事件の起きた

正確な時間を

知りたいだけだから…

かなえさんは
何も心配せずに

事件の事だけを
思い出してくれるだけで
いいからね」

かなえ
「……でも

事件の事は全て
警察に話してあるし……」

U良太郎
「……だね

でもこの資料には
何が起きたのかは
書いてあるけど……

かんじんの時間が
あいまいだね……

僕が必要としてるのは
時間……なんだよね」

正確な時間…

それがわかりさえすれば…

後は…

僕にまかせてほしいなあ」

かなえ

「時間…？」

でも…

正確な時間なんて…

私…覚えてないし」

U良太郎

「そのために

このカードが

…あるんだよ

これはね

アルティメット

サーフィッシング

オースって

組織が

極秘に開発したもので…

一般人には

知られてないけど

僕たちのような

限られた職業の人間には

広く使われてる

カードなんだ

これで君が時間を

思い出せなくても

このカードが脳波から

時間を割り出してくれる

夢のようなカードなんだよ

だから

かなえさんは

何も心配しないで

事件を思い出して

くれればいいんだよ

…じゃ…

次の事件

かなえさんの
住んでいるアパートの
裏で他の部屋の住人が
死亡してた事件…だね」

かなえ

「…それは

私の部屋のベランダに
置いてあった植木鉢が
何かのひょうしに
落ちて…

彼の頭に当たって…

私には

殺す動機なんてないし…

時々…道で会って
話すぐらいの人で…

でも…警察の話では
彼の部屋から

盗み撮りした

私の写真が

いっぱい出てきて…

亡くなった彼の手には

干していた私の下着が
握られていて…

その時…私は
部屋には居たけど…

音楽を聞いてて…
気付いてなかったし…

なのに犯人にされて…

下着をわざと落として
拾っている間に

植木鉢を
投げつけたんだって
言われて…

私…絶対そんなこと
してないのに…

誰も信じてくれなくて…」

U良太郎

「…なるほど

ちょっと失礼」

OK、大丈夫だよ

この事件も

解決したも同然、

大漁船に乗ったつもりで

僕に任せてほしいな……

じゃ、3つ目の事件……

宝石泥棒……」

第二章…事件簿…5

かなえ

「その事件も
身に覚えがなくて…」

いつの間にか…
買い物袋の中に
ダイヤの指輪が
沢山入っっていて…

次の日にお店に
届けようと
思ったんですが…

あの交通事故に…」

U良太郎

「なるほど…
でもなぜ…」

宝石店に行ったのかなあ？

しかも何も
買って無いよね」

かなえ

「それは…

彼に…

好きな指輪の

デザインを

教えてほしいって

言われて…

それで…仕事の帰りに

見に行ったのが

たまたま…

あの店だったんです」

U良太郎

「なるほど…

彼氏がいるんですか…」

かなえ

「はい

その指輪が…

婚約指輪に

なるはずでした…

…でも

こんな事に
なってしまうて…

前の弁護士さんが…

彼に連絡を
とってくれたんですが…

…『もう 関係無い』
って

…言われたらしくて

一番…

ささえてくれると
思ってた人なのに…

…もう

誰にも…

信じてもらえない…

私は誰からも
必要とされてない…

こんな私なんか…」

U 良太郎

「まってまって」

そんなに自分を

せめちゃいけないよ」

大丈夫だから

落ち着いて

宝石店の事を

思い出して…

はい…カードで」

OK」

これでこの事件も

解決したも 同然」

絶対大丈夫だから」

さて…次の事件は」

お店の売上金の横領…

え〜と

お店の閉店作業は

店長とかなえさんが

1日おきにしている…

次の日の朝に

店長が売り上げの確認をしたときに気付いた…

現金が足りない時が

半年の間に時々あり

総額50万円…

被害届が店長から

出された…」

かなえ

「そんな事…

してません…」

U良太郎

「…だね

わかるよ〜

じゃ〜

カードで

…OK

大丈夫だよ

これは楽勝だね

それから最後は…

都内15個所の

ビル爆破に使用された
時限装置の部品が

かなえさんの部屋の

クローゼットから

見つかった…

これは？」

かなえ

「そんなもの私
作れないし

ビル爆破…

無差別殺人なんて…

するわけないじゃ

ないですか

作れないなら

仲間がいるんだろうとか…

現にダンボールと

時限装置の部品から

私の指紋が出たって

言われて…

まったく記憶に

ないのに…」

U良太郎

「大丈夫だよ」

僕は信じてるからね」

じゃ～カードで…

～OK

これでこの事件も

解決……

あれ…？

日付が出てこない…

何でだろう？

《それって

… かなえさんは

爆弾なんかに

関わってないから

記憶として日付が

でないんじゃないかなあ…

》

第二章…事件簿…6

…なるほど

良太郎…

頭さえてるね

流石…だね

でも困ったなあ…

確かに…時限装置は

かなえさんの部屋から
出てきたのに

本人には記憶がない…

これじゃ過去にも
飛べないし…

《その指紋のついた
ダンボールの写真って
あったよね？

それをかなえさんに
見せたらどうかなあ…

何か思い出すかも…》

…だね

え〜っと

この写真…だね

かなえさん

この段ボール箱に

心あたりは…

ないかなあ？」

かなえ

「覚えてません…

部屋に有った

らしいけど…

お店の段ボール箱

でもないし…」

U良太郎

「そっか…

残念…だね

《ウラタロス
かなえさんに
カードをあててみて》

…？

……！

なるほど

ひょっとして…

ちょっと失礼…

……！

…でた！

出たよー良太郎

かなえさん

…この日付に記憶は？」

かなえ

「…さあ？」

U良太郎

「…思いだせないか

残念…だね

でもね…かなえさんが

この段ボール箱を見て

この日付が出たって事は

この時間に

かなえさんは

確実に

この段ボール箱に

触ったって

事なんだよね〜

かなえさん

他の事でもいいから

何か変わった出来事とか
何でもいいから

思い出して
ほしいなあ……」

かなえ

「ごめんなさい……」

……あ

変わった事と言えば……

仕事から帰った時

玄関の前に

いろんなゴミが

捨てられていて……」

U 良太郎

「そのゴミどうしたの?」

かなえ

「ドアの横によけて
中に入りました

朝にはそのゴミは
無かったから……」

気にしなかったんですが……」

U良太郎

「それ……だね

きつとその中に

この段ボール箱や部品が

まざってたん……だね

じゃ……これも

解決……だね

かなえさん

思い出してくれて

ありがとう

これで……君は無罪だ」

かなえ

「何を言ってるの？

私の身に覚えがない

事はわからないけれど

人をひいてしまったのは

事実だし

その罪は消せないわ

たとえ罰が軽くなっても…

人を殺してしまった

その記憶は消すことは
出来ないわ」

U 良太郎

「それがさあ」

できちゃうんだよねえ」

僕がこのカードで
デンライナーに乗って
過去に飛び…

《…え？

まずいよウラタロス

なんで？なんで

しゃべっちゃうの？》

大丈夫だよ良太郎

さて…

僕は今から君の過去を
変えてくる

安心して…

待つて欲しいなあゝ

…未来の花嫁さん」

第二章…ズバツと解決…1

~~~~~  
取り調べ室の外  
~~~~~

U良太郎

「さ…てと

あとはデンライナーに
戻ってみんなに
カードをくばるだけ
…だね

《ちょっとまって…
ウラタロス…

さっき…なんで
かなえさんに

デンライナーの事とか
しゃべっちゃうの？

僕たちの正体は秘密に
しとかないと…》

あゝ

あれは
大丈夫…だね

《…どうして?》

いいかい良太郎ゝ

今から彼女の過去を
変えに行くよね

そうしたら

彼女は犯罪者じゃ
なくなるじゃないかゝ

だったら

今後…取り調べ室で
会う事にもならないし

僕たちの会話も…
無かったことになる…

つまり…この時間は
消滅する…

だから何を話そうが…
彼女の記憶にも
残らないし

彼女と会った事実も
無かったことになる…

そうそう

残念だったねー良太郎
さっきの彼女に興味や
好きな食べ物とか
聞いておけば…

これからの恋愛が
すごく有利に
はこんだのにねえ

…えー！
どうして私の
好きなものが
そんなに
わかつちゃうの

私の気持ちは
全部お見通しなのね

それに、

こんなに相性が

合うなんて

信じられない

私たちはきっと

運命の赤い釣り糸で

ギュッと

結ばれてるんだわあ、

フィンガーノット

かしらあ、

《ウ…ウラタロス

性格…変わってない…？》

……

いくよ良太郎、

~~~~~  
デンライナー食堂車  
~~~~~

ウラタロス

「みんな」

お待たせ」

今からカードを
選んでもらうよ

どれがいい？

人身事故

撲殺

宝石泥棒

窃盗

爆発事件

…まあ、どれも

やっかいそうだけど…

先輩はどれがいい？」

モモタロス

「どれでもいいぜ」

俺様にとっちゃ」

こんなもん

朝飯前なんだよ

…

選んだよなあ…

…

こいつだ…!!

…ん？時間？

…おい

カメなんだよこれ？

こいつあ

何の事件だ？」

ウラタロス

「先輩のは

人身事故…だね」

モモタロス

「ケツ!!

楽勝だなあ」

リュウタロス

「じゃ」

つぎボクが引いてもいい？

…これだ」

…カメちゃん

これ何？」

ウラタロス

「それはお店の

売り上げの窃盗…だね」

リュウタロス

「えっつまんなさそう」

換えてもいい？

答えは聞か…」

(ドン)

キンタロス

「あかん！！

次はオレの番やゝ

きつといいのが…

引けるでゝ！！

…

…カメのじ

これ…なんや？」

ウラタロス

「爆発事件…だね」

キンタロス

「ダイナミック

…ドカゝン

（パラパラパラ）

ごつつぁんです」

モモタロス

「バカクマ」！

いちいち懐紙

まくんじゃねえ」！

第二章…ズバツと解決〜2

キンタロス

「痛いやないか!！」

モモタロス

「よかつたなあ〜

クマ〜

痛いのは生きてる

証拠だぜ〜」

キンタロス

「何言うとんねん

だいたいお前は…!！」

リュウタロス

「ワァ〜イ

ケンカだケンカだ〜

クマちゃんがんばれ〜」

ウラタロス

「さゝて

良太郎ゝ

おバカ3は

ほつといてゝ

残りは2枚

どっちがいい？」

良太郎

「どっちでも…」

ウラタロス

「ダメだよ

良太郎ゝ

これは良太郎の

大事な未来が

かかってるんだから

ちゃんと自分で

選ばないと…

さあゝ」

良太郎

「…未来が

わかったよ…

じゃ…

こっちで…」

ウラタロス

「宝石泥棒…だね

僕が…撲殺か…

さ…て

カードは決まった

…先輩…

いつまで暴れてるの…！
」

モモタロス

「バカやる〜！」

見てねえで

早くこのクマ

どける〜！

良太郎〜！

わ…笑ってんじゃ
ねえ〜

…ウツ
」

ウラタロス

「ああ〜

先輩のびちゃった…

しょうがないなあ〜

じゃ〜僕のカード
から行きますか〜

ナオミちゃん

このカードお願い

それと〜コーヒー
」

ナオミ

「はいヨ」

ウラタロス

「はくりよく

…だね」

ナオミ

「…なんか言つた？」

ウラタロス

「いや」

別に…

そう言えば…

娘さんのお加減は

どお？」

ナオミ

「お陰様で

風邪は治った
みたいよ〜

次のステーションで

娘と交代する予定よ〜」

ウラタロス

「それは

よかったねえ〜

…みんな」

ナオミ

「なんか言った？」

ウラタロス

「いえいえ〜

…地獄耳…だね」

良太郎

「モモタロスの
娘さんたしか…
フウカさん
だったよね

どんな人だろう…」

ウラタロス

「そっか」

良太郎はまだ
会ってないんだよね」

風加ちゃんは
昔のナオミちゃん
より美人…だね

色白で髪が長くて」

先輩の娘じゃなかったら
僕が釣りたいぐらいだよ」

良太郎

「そうなんだ…

早く会ってみたいなあゝ

…あつそうだ
ところで…

さつき

かなえさんに
言ってた

あのアルティメット…

…なんとかの
組織って何？

あれも…でまかせ？」

ウラタロス

「失礼しちゃうなあゝ

あれはゝ

でまかせじゃなく…

ウソ…だね」

良太郎

「同じだよ」

ウラタロス

「違うよ」

アルティメット

サーフフィッシング

オース

つまり…

ULTIMATE

SURF FISHING

OATHは

『究極の

投げ釣り宣言』

略して…

U・S・O

つまり…

ウソ…だね」

良太郎

「なにそれ」

……でも

サーフフィッシングなら……

U・S・F・O

じゃない？」

第二章…ズバツと解決…3

ウラタロス

「……………」

まあ…

カタいことは…

海に流して…

…それより

ついたよ良太郎」

「……………」

アパートの裏

「……………」

ウラタロス

「ここ…だね」

良太郎

「ここで男性の頭に
植木鉢が当たって
死んでたんだよね…

手に下着を持って…

でも今は下着は
どこにも

落ちてないし…

下着はまだ2Fの
ベランダに
干されてる…」

ウラタロス

「良太郎…！

誰か来る
隠れて！！」

良太郎

「…え！？

…あれは

1Fの男性だよね

…時計を気にしてる

…誰かと待ち合わせ？

…あ！

上から下着が
落ちてきた…

それを拾って…

…あっ！

下着が

なぜ落ちたのか
見てなかったよ…

…あ！！

危ない！！

植木鉢が

シートに押されて
落ちたよ…！

ウラタロス

「まかせて！

ヨッ！

それゝ」

良太郎

「すごい！

植木鉢の

一本釣りゝ」

ウラタロス

「だね

どうやら真相は

風にあおられた

シートが

植木鉢を

落としたって事

…だね」

良太郎

「よかったゝ

これで

かなえさんは

無罪…

いや…

事件そのものが
発生しなかったって
事だよな？」

ウラタロス

「…だね

でもあの男…

かなえさんの下着を
持って行っちゃったよ

取り返しますか？」

良太郎

「そうだよな

…それはそれで
問題だし…

…いくよ

ウラタロス」

~~~~~

男の部屋

~~~~~

コンコン

男

「はい」

良太郎

「あの

はじめまして
野上良太郎と
申します」

《良太郎

挨拶はいいから》

「あの さつき
裏で拾った物

か」返して下さい」

男

「…な

何も拾ってないですよ

ひ…人違いです」

良太郎

「ま…待って下さい

ぼ…

ぼく…見たんです

かなえさんの

洗濯物の…下着が

落ちてきて

それを…あなたが
ポケットに入れる
ところを…

《良太郎…

少しかわろうか?》」

男

「し…知りません

…さようなら」

U 良太郎

「ちよつと待ちなよ
くボクちゃん

僕を相手に

しらを切るとは

たいした度胸…だね

早く右のポケットに
握り締めてる
物をださないと…

署の方に

来てもらう

事になるよ

今…素直に返すなら

罪には問わないが
ごねるなら…

家宅捜査でも
してみますか…？

どんな物が…
釣れるかなあ…？

きっと写真が大漁
…だね」

男

「ご…ごめんなさい
あ…後で返すつもり
だったんです…」

これ…返します」

U 良太郎

「そうそう
そうやって
素直に出せば…
問題無かったんだよね」

じゃ…これは
僕から彼女に
返しておくからね

じゃ…さようなら」

第二章…ドカンと爆発…1

～
～
～
かなえの部屋
～
～
～
～

(コンコン)

かなえ
「はい」

良太郎
「あの…」

はじめまして
野上良太郎と
申します…」

かなえ
「…!!」
またあなた!?

今度は何ですか？」

良太郎

「…え？」

えええ…つと

これ…

植木鉢が…

落ちてきたので…」

かなえ

「…？」

…どうも

…？

植木鉢が…？

これって…

ベランダに

置いてた…

なんであなたが

アパートの裏に
居たの？

やっぱり
あやしい！！」

良太郎

「いや…

別に…

あやしい事
してた
わけじゃなくて…

たまたま…
通りすがり…
で…」

かなえ
「あんな所
たまたま歩くわけ
ないでしょ！！

もういいです！！

二度と来ないで
下さい！！」

（ボタン！！）

良太郎

「…ごめんなさい

…どうしたんだろ
かなり怒ってる…

《…順番からいって…

リュウタか
キンちゃん…だね

何かやらかしたのかなあ…??》

…初対面なのに

すでに嫌われてる…

《まあまあ…

死んだ人は
いないんだしゝ

不幸中の幸い…だね》

…不幸中の不幸だよゝ

…絶対やだゝ

《さゝて

デンライナーに
戻るよ良太郎》

えええゝ
」

ゝゝゝゝゝゝゝ
デンライナーの中
ゝゝゝゝゝゝゝ

良太郎

「……………」

モモタロス

「どうしたんだよ！良太郎」

顔色わるいぞあ？

なんかヘマ

しちまったのかよ？」

良太郎

「多分…僕じゃ

ないと思うけど…

すでに嫌われてた…」

モモタロス

「なんだ？

…ったく

しょうがねえ野郎
だなあ」

済んじまったことは
しかたねえじゃねえか」

そんなに

落ち込むなよ」

良太郎

「…だつて

まだ…

へました覚えが
無いのに…」

キンタロス

「良太郎」

落ち込むなら

トコトン

落ち込んだらええ」

その後は

はい上がるんや」

それしかない!!」

(コキッ)

良太郎

「キンタロスが
一番…」

あやしいけどなあ……」

キンタロス

「なんかゆったか
良太郎？」

ほな次はオレの

活躍見せたるうやないかあゝ

行くでゝ良太郎」

~~~~~

かなえのアパート

~~~~~

キンタロス

「ここやなゝ

しかし

ダンボール箱なんか
無いやないかゝ

時間を

間違えたんと
ちゃうか？」

良太郎

「そんなはずないよ
かなえさんが
帰宅したときには

ゴミがドアの前に
置かれてたって
言ってたし……」

キンタロス

「せやけど……
なんにもない
やないか」

……！！

良太郎！！
あれ見てみい」

第二章…ドカンと爆発…2

良太郎

「隣の部屋の人？」

キンタロス

「何しとるんや

アイツ！！

かなえさんの

部屋の前に

ゴミ置いたのは

アイツやなあ！！

間違いない！！

オレの推理に

お前が泣いた！！」

（コキッ）

良太郎

「
…まあ

確かに…

今…置いてるし…」

キンタロス

「オレがいつて

こらしめたる！！」

良太郎

「待つて〜！

キンタロス

もうすぐ…

かなえさんが

帰って来る時間だし…

今…会つと…

ちよつと…

嫌われる

気がするなあ…

それに…

あのダンボール箱が

どうやって
押し入れに
入ったのかも
知りたいし…

少し…
見てた方が
いいかも…」

キンタロス

「…

そうか？」

良太郎が

そうしたいなら…

オレは口出しする

気は無い

いっぺん気が

すむように

やってみる

…ほな

ちよつと

寝かせてもらうわ

必要な時は

よんだらええし」

(コキッ)

良太郎

「ありがとう
キンタロス

…あ！

かなえさんが
帰ってきた

…

ドアのゴミに
気づいて…

ゴミを横によけて…

…この時に指紋が
ついたのか…

部屋に入って行った…

…

隣の男が出てきて…
ゴミを自分の部屋に
持って帰った…！

……

この後は…

かなえさんは

翌朝まで部屋に

いるはず…

押し入れに

ダンボール箱を

置くとしたら…

かなえさんが

仕事に出かけてる

あいだに

忍び込むのかなあ…

…あれ？

どうやって？

…合い鍵？

かなあ？

夜中かなあ？……」

くくくくくくくく

翌朝 アパートの前
くくくくくくくくくく

良太郎

「《良太郎…

良太郎！！

いつまで

寝とるねん！！》

…むにや

…あ！！

しまった！！

寝ちゃってた！！

《しょうがないなあ
く良太郎！

心配せんでも

良太郎が

寝てるときに

オレが見張ってたさかい

安心せえゝ

大丈夫や！！

男は夜中に

かなえさんの

部屋には行つてない

それより

かなえさんが

車で仕事に

出かけよるでゝ》

じゃゝこの後に

忍び込むんだね…
「

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

夕方 アパートの前

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

良太郎

「…あれゝ？

動きがない…

…どうでもいいけど

お腹すいちゃったなあ…

何か買つてこようかなあゝ

…あれ？

これは…

くああ！！

かなえさんの
下着だ！！

…そうだ

植木鉢を返すとき
返しそびれたんだ…

どうしよう

返すにも…

何て言えば

いいのかなあ…？

《何しとるんや

良太郎

隣の男が出かけるで！
あとをつけるか？》

…いや

出かけるなら…

部屋に忍び込んでみよう

《そうきたか》

ヨッシャー！！

オレがドア

開けたる！！》

第二章…ドカンと爆発…3

え〜！

ダメだよ

ドアこわしちゃ〜

《良太郎》

誰がこわすって？

これはなあ〜

こつするんや《

（砂になり

ドアのすき間から
中に入った）

良太郎

「なるほど…」

（カチャ）

キンタロス

「まあ」

オレにかかれば…

こんなドア

こわすまでも

あらへん

さあゝ入り」

良太郎

「…おじゃましてゝす
つと言つても

誰もいないよね…」

キンタロス

「当たり前やないか」

しかし…

何やこの部屋？

ほんまに人が生活
しとるんかいなあ

有るのは布団と
粗大ゴミばかり
やないかあ」

良太郎

「キンタロス

粗大ゴミじゃないよ

これは…

時限爆弾だよ

AからZまで文字が
書いてある…

爆弾は26個
有ったんだ…

どうしよう…」

キンタロス

「どうしようも

こうしようないで

良太郎」

そんなもんは

この時代の警察に
まかせといたら
ええがなあ」

良太郎が

せなあかんことは
彼女の罪を
無くすことや

罪を憎んで
人を憎まず……」

良太郎

「キントロス……
……使い方がちがうよ」

キントロス

「……違う？」

……なんでや？

………ん？

そんな事より

……隣のかなえさん
帰ってきたんちゃうか？」

良太郎

「……え？」

そうなんだ…

じゃゝ気づかれない
ようにしないと…

キンタロスあまり
大きな音は
たてないでね…」

キンタロス
「わかつとる！

…抜き足

…差し足

…カモノハシ」

良太郎

「…それも違うよ」

キンタロス
「そうか？
ほなら…

壁に耳あり

…障子にメアリ―

…押し入れに穴有り」

良太郎

「…なにそれ？」

普通…

障子にあるのは
目だよ

それに押し入れに
穴なんて…

…あ

有った…

押し入れの天井に
穴が開いてる…

…なにこれ？」

キンタロス

「でもなあ」

良太郎

障子に

目があったら

ぶきみやで

間違いない！」

（コキッ）

良太郎

「……………そっか

この穴から
隣の部屋に…

キンタロス

調べてみて」

キンタロス

「

…無視された

まあゝええゝ

よつしやゝ

まかせとけ！

…？

…あかん真つ暗や

良太郎ゝ

そこらへんに

なんかないか？」

良太郎

「そこらへんって
言われても…

…あ

懐中電灯があつたよ
はいキンタロス」

キンタロス

「おおきに」

ごつつあんです！」

良太郎

「…それはいいから

早く調べて」

キンタロス

「そないに

あせらんでも

ええがなあ」

…大変や！！

良太郎」

こと

かなえさんの

部屋が

屋根裏で

つながつとる！！」

良太郎

「ええええ」

第二章…ドカンと爆発…4

キンタロス

「わかった！
ここを通って

隣の押し入れに
ダンボール箱と
部品を入れたんや！！

間違い無い！！」

（コキッ）

良太郎

「たぶん…
それしかないと
思うよ…」

…犯人はもう
かなえさんの
押し入れに
ダンボール箱を
置いたのかなあ？」

キンタロス

「そんなもん

ここから入って

確かめたら

わかる事や!!

…こうやって

…ん?

あかゝん

肩のオノが

つかえて入れん!!

良太郎ゝ

代わってくれ」

良太郎

「え…?

今は…

やめたほうが…」

キンタロス

「何言うとるんや!

このまま

かなえさんが罪を
きせられたままで
ええわけないやろ！

ちよこつと

のぞくぐらい
たいしたことや
あらへん！！

すぐに済むし

他に調べる方法も
無いやないかあゝ

この状況で
できるのは

良太郎ゝ

お前しか
おらん！

良太郎

「…でも」

キンタロス

「でもやない！！」

良太郎が無理なら
これしかない!!」

くくく

くく

く

K 良太郎

「良太郎く

ちよつと

体かりるでえく!

《キンタロスく

そんなあく

強引すぎるよく》

かまへんかまへん!!
すぐにすむよつて

まあく

おとなしく

みといてくれたら

ええしく

ほなく

いくでく

」

(コキッ)

くくくくくく
屋根裏

K良太郎

「えらいクモの巣
だらけやなあ」

《しょうがないよ
屋根裏なんだし…》

ここやなあ
…ん？

板が外されとる

あ！！

良太郎！

箱と部品が

あんなとこに！！

…取るしかない！！

《…大丈夫かなあ》

大丈夫に決まっとる！

いくでえゝ

ゝんん

もうちょっとやあゝ」

（バリバリバリゝ）

かなえ

「何？何の音？

…押し入れ？

キヤアゝ！！！！！！

なななんなんですか！

あなた！

そ…そこで

なにしてるの！！！！」

良太郎

「痛いなあ…

だからやめた

ほうがいい…って

あれ？

キンタロス？

《すまん！

良太郎》

後はたのんだ《

そ…そんなあ！…」

かなえ

「な…何一人で

言ってるの…！！

警察よぶわよ！…」

良太郎

「ま…待って下さい…！

えっと…えっと…

…あ

僕は工事の人間で…

屋根裏の…

は…配線を

見ていたら

底が抜けてしまつて…」

かなえ

「そんな工事が

あるなんて

聞いてません!!」

良太郎

「…あの

と…隣からの

工事なので…

大丈夫かなあと…

連絡しなくて…

ごめんなさい

…いや

びつくりしちゃったなあ…

…汗が」

かなえ

「…ん？

それ…私の…」

良太郎

「…え？

わ！！

あ…あのこれは…

そこで拾って…

いや…たまたま…

いや…あの…その

返します！！」

かなえ

「当たり前です！」

第二章…サラツと解決…1

良太郎

「押し入れは
すぐに直します

それから…

この箱とこれは
僕なので
持って行きます」

かなえ

「当たり前です
早く出て行って…！」

~~~~~  
デンライナーの中  
~~~~~

ウラタロス

「…で

無理やり

追い出されたん

…だね」

良太郎

「無理やり…
って言うか…

あの場合

どうしようも
なくて…

でもちゃんと

不動産屋に

お金を払って

直してもらう話は
済ませてきたよ」

ウラタロス

「…でも

仲良くは

なれずじまい

…だね

ほんと…

良太郎はどこまで

いっても

ついてないよね

ある意味
奇跡…だね」

良太郎

「そ…そんな
…だいたい
僕が止めたのに

キンタロスが
強引に…」

キンタロス

「良太郎」
自分の失敗を
他人のせいに
するのは…

あんまり」
感心できた事や
ないなあ」

いやあ」

しかし」

天井があんなに
モロいとは

思わんかったなあゝ」

モモタロス

「てめえゝが

重すぎんだよ！

失敗したのは

バカクマ！

てめえのせいだよ！！」

キンタロス

「失敗？

天井が壊れた

おかげで

箱も部品も

取り除けたし

下着も自然な形で

返せたやないかあゝ！」

モモタロス

「どこが自然なんだよ！！
お前さえ……」

良太郎

「もういいよ

モモタロス…

キンタロスも

悪気があつた

わけじゃないし…

これでかなえさんは

爆弾犯にされずに

すんだんだし」

モモタロス

「いいのかよ

それで…」

良太郎

「いいよ

これで…

後は僕が

がんばってみるし」

モモタロス

「そっか」

良太郎がいいんなら

俺たちは何も

言わねえよ

まあ」

がんばってみなよ」

良太郎

「ありがとう」

リュウタロス

「じゃあ」

次 ボクの番で
いいよね」

行くよ」良太郎」

花屋

良太郎

「この花屋で
かなえさんは
働いてるんだね…」

リュウタロス

「こんにちは」
誰か居ませんか」

お客さんですよ」

…返事がない

留守かなあ？」

良太郎

「不用心だなあ…
これじゃ」
盗難にあっても
わからないよね」

リュウタロス

「でも」

ちゃんと

監視カメラが

あるよ」

何も映って

なかったの？」

良太郎

「それが」

3台あるうちの

1台がレジ用

なんだけど」

少しずれてて」

肝心のところが

映っていない

らしいよ」

リュウタロス

「へ」

なんだか

あやしいよね」

じゃあ」

「こうすればあゝ」

良太郎

「それは

玄関用だよ？

それをレジに
向けるの？」

第二章…サラツと解決〜2

リュウタロス

「そうだよ〜

このタイプの

カメラなら

どっちに向いてるか

わかりにくいし〜

レジ用を

元に戻しても

犯人はまた

ずらすと思うし〜」

良太郎

「じゃ…

犯人は店の人？」

リュウタロス

「そんなの

わかんないよ〜

ボクは誰が犯人か

なんて

答えは聞いてないし〜

興味ないからねゝ

じゃゝ帰るよ

良太郎ゝ

良太郎

「え？本当に…
帰っちゃうの？

犯人は捕まえないの？
捕まえないとしても
さとするか…」

リュウタロス

「なんで？

それはボクの
仕事じゃないしゝ

ああしとけば
勝手に犯人が
映るからゝ

後は警察の
仕事だしゝ

だから

ねえ

早く帰ろうよ

こんな所

ボク長く

居たくないし

変なんニオイも
するし

良太郎

「リュウタロスは
花が嫌いなのか？」

…まあ
いいけど…

じゃ

帰って

モモタロスと
交代だね

~~~~~

路地

くくくくくくく

モモタロス

「まあ」

小僧らしいよなあ」

俺たちやイマジン  
相手なら暴れる  
けどよ」

泥棒や盗人は  
普通の警察に  
まかせときゃ  
いいんだよ」

良太郎

「まあ…それは  
そうだけど…」

モモタロス

「それより…」

あそこだよなあ」  
嫁さんが人を  
ひいたのは…」

良太郎

「そうだね…」

モモタロス

「って事は…」

あいつが

ひかれる男か？」

良太郎

「そうだね…」

あの人で…」

横にいるのが

奥さんだと思うよ」

モモタロス

「あいつら

なんで

かくれてんだ？

…良太郎

こいつは  
あやしいぜ」

良太郎

「そうだよな  
…ひよとして  
あたり屋かも」

モモタロス

「なんだそりや？  
ブーツの形した  
あれか？」

良太郎

「…それは  
イタリア

あたり屋は  
車にわざと  
ぶつかって

慰謝料を  
受け取る  
犯罪だよ」

モモタロス

「なるほど

軽くあたる

つもりが…

飛び出し過ぎて  
引かれたんだなあ

どおりで…

マヌケなツラ

してやがるぜ」

良太郎

「行くよ

モモタロス

僕に憑いて…」

モモタロス

「よっしゃー！！

いっちょ

こらしめて

やるかあ」

〃  
〃  
〃

〃  
〃

〃

M 良太郎

「俺 参上!!」

おう

「そのオッサン!!」

男

「…わ!!」

「ごめんなさい!!」

M 良太郎

「な…なんだ？」

「まだ何にも言つて  
ねえだろうか!!」

男

「ごめんなさい!!」

「ごめんなさい!!」

「ごめんなさい!!」

M 良太郎

「うるせえ〜!!」

ここじゃ

何だからよう!

オッサン!!

ちよつとツラ

かしなあ〜!

《モモタロス

もう 大丈夫だよ》

## 第二章…サラッと解決…3

なに！？

なんでだよ！！

まだなんにもして  
ねえじゃねえか！！

今から俺様が  
コイツらを  
ビシッと！！

《今 かなえさんの  
車が通り過ぎたよ》

え？  
じゃ…

《交通事故を  
防げたんだよ

だから終わり

じゃー帰るよ  
モモタロス》

ち…

ちよつと待ったあゝ！！

俺は！！

どうすんだよゝ

このワナワナした  
感情はゝ！！

ああゝ！！

暴れてえゝ！！！！》  
「

ゝゝゝゝゝゝゝ

デンライナーの中

ゝゝゝゝゝゝゝ

ウラタロス

「リュウタでも

早いなあゝと

思ったら…

先輩の方が

最速だったねゝ

さすがゝ先輩

ご苦労様でしたゝ」

モモタロス

「カメ！！

どうせ腹ん中で

笑ってやがんだろ！！

俺は声かけた

だけじゃねえかあ！！

あんなもん

活躍でも

何でもねえ！！！

…そうだ！

良太郎

お前の分

俺様がやってやるよ

だから…

カードかせ…

遠慮しなくて

いいからよ

良太郎は

ここで休んでて  
いいからよ」

良太郎

「いいよ」

モモタロス

「よし！！」

俺様が行ってやる」

良太郎

「じゃなくて…」

いいよ…

これは僕が1人で  
やってみる

自分の事だし…

やらなくちゃ

…このままじゃ

彼女に

嫌われたままだし…

モモタロスの方こそ

ここで休んでて

じゃー

行ってくるよ」

~~~~~

宝石店

~~~~~

良太郎

「ここかあ…

わあ…

宝石って高いんだ…

かなえさんは

どんなデザインが

好きなのかなあ…

あ…

かなえさんが来た」

女性店員

「いらっしゃいませ」

かなえ

「あの…」

今日は見るだけ  
なんですけど…  
いいですか？」

女性店員

「はい

大丈夫ですよ  
お荷物こちらに  
置いてもらっても  
かまいませんよ」

かなえ

「ありがとうございます  
ございます

じゃ…」

女性店員

「プレゼントですか？」

かなえ

「いえ」

私のなんですが…

彼が仕事が

いそがしくて…

センスもなくて

わからないからって

私の好きな

デザインを

選んでいいよって

言ってくれたので

ちよつと下見に…」

女性店員

「まあ」

いい彼氏さん

ですねえ」

じゃー

「ご予算とかは？」

かなえ

「それも

気にしなくて

いいって

言ってくれたので」

女性店員

「わかりました

…ひょっとして

「ご結婚されるんですか？」

かなえ

「はい」

女性店員

「そう

おめでとう

ございます

じゃーこれなんか  
どうです?」

かなえ

「ありがとうございます

でも…ダイヤは  
ちよつと…

普通に

シンプルなのが  
いいなあ」

このハート型のが  
可愛いかも」

女性店員

「つけて見られます?」

## 第二章…ちょっと複雑〜1

かなえ

「いえいえ

…また彼と  
来たときで  
いいです

今日は見る

だけですから…」

女性店員

「そうですか

そのデザインが  
お気に入りですか？」

かなえ

「はい

今度は必ず  
彼氏と来ます

…それまでに  
これ売れちゃう

かなあ……？」

女性店員

「大丈夫ですよ  
それまで  
隠しておきます」

かなえ

「ありがとうございます

ございます

じゃー

また来ますね」

女性店員

「はい

お待ちして

おります

ありがとう

ございました」

良太郎

「…ハートの  
指輪かあ…

これがいいんだ…

…ん？

かなえさんは

結局…

宝石には

触れてない…

でも…

宝石を盗んだ事にな  
って…

…いつ？

…？

あの荷物？

…まさか！」

女性店員

「いらっしやいませ

指輪をお探しですか？」

良太郎

「いえ…

僕は…ちがいます」

~~~~~

橋の上

~~~~~

良太郎

「まって…

かなえさん!!」

かなえ

「…だれ?

あ!!

あなたは!!

なんですか!!

こんなところまで!!

…それ以上  
近づいたら

大きな声  
出しますよ!!」

良太郎

「…え？

…わかったから

これ以上  
近づかないから…

あの…  
調べてほしい  
事があるんだけど…

その紙袋の中に…

宝石が…  
入ってるかどうか」

かなえ  
「…何言ってるの？

そんなもの  
入ってる  
わけないでしょ!!」

良太郎  
「…開けてみれば  
わかるよ…」

かなえ  
「近寄らないで!  
人を呼ぶわよ!!」

A男  
「どうかしましたか?」

E男  
「もめてる?  
それとも…」

ひつたくりかなあ?」

かなえ

「助けて下さい!!」

あの人に最近

つけまわされてて」

A男

「ストーカーか…」

ダメだよ坊や」

痛い目に

あう前に消えな!!」

E男

「そうだよ」

じゃまなんだよ」

A男

「…お嬢さん

助けてあげるから…」

その紙袋を

よこしな!!」

かなえ

「…え？」

良太郎

「…何？」

A男

「それは俺たちの  
宝石なんだよ！！」

かなえ

「宝石？」

そんなもの

入ってません！！  
人違いです！！」

E男

「ちがわねえよ！！  
こっちへよこせ！！」

かなえ

「いや！！

やめて！！

だれか！

助けて！！」

良太郎

「た…たいへんだ！！

助けなきゃ！！

行くよ

モモタロス！！

《……………》

俺！　さんじ……

あれ…？

モモタロス？

《良太郎！  
俺は行かねえよ》

え？

なんで？

じゃ…

キンタロス！！

《アカン！！

良太郎！

ここはお前の

ターンや！！

間違いない！！！》

（コキッ）

## 第二章…ちよつと複雑〜2

タ…ターンて何？

ならウラタロス！！

《気持ちは  
わかるけど…  
…ゴメンネ》

…リュウタロスは？

《良太郎〜  
ボクなら行けるよ》

《行くんじゃねえ！！

小僧！！

てめえは座つてろ〜！！

良太郎〜！！

相手は

イマジンじゃねえ！！

嫁さんにいいとこ

見せんなら今だぜ！！

ビシッと

決めてこい！！》

…わかったよ

みんな！！

見てて！！

まで〜！

その人からはなれる〜！！」

E男

「なんだ？

そう言われて

離れた奴をオレは

知らねえなあ〜

あんちゃんよ〜

俺たちに勝てると

思ってたのかよ〜！！」

良太郎

「思ってますん!!」

A男

「なんじゃそら!!」

良太郎

「でも…男には  
負けると

わかってても

やらないきや

いけない時が

あるんだ!!

僕は…

かなえさんを守る」

A男

「やれるもんなら  
やってみろ!!」

(グイッ ゴン!!)

良太郎

「ウツ!

…イタイ

…………エイ!!」

A男

「ワツ!

タツクルかよ!!

…クソ!!  
離せ!!」

良太郎

「今だ!!

かなえさん!!  
逃げて!!」

E男

「待てよ!!」

…ん？

コラ!!

離せ！ベルト

つかむんじゃねえ!!」

良太郎

「ヤダ…!!」

絶対離さない!!

…こんな時に

だれか…だれか…

…あ!!

お巡りさん!!

お巡りさん!!」

警官

「どうしました!!?」

良太郎

「助けて下さい!!」

この人たち

宝石泥棒なんです」

警官

「なに?」

E男

「やばい!!」

逃げろ!!」

警官

「コラ!!」

待て!!

キミ!!

大丈夫か?」

良太郎

「僕は…」

大丈夫ですから

早くアイツらを…」

警官

「わかった！

任せなさい！！

コラッ！

待てッ！」

良太郎

「…大丈夫かな？

…あっ！！

犯人が転んだ…」

お巡りさんが

追いついたッ

よかった…」

これで…」

—安心…」



かなえ

「……！」

…なんだ

あなただったの…」

良太郎

「もう

大丈夫だよ

アイツらは

お巡りさんが

捕まえたから」

かなえ

「そお……」

じゃ…

私は…帰ります」

良太郎

「家まで送るよ…」

かなえ

「…こないで！」

良太郎

「え？」

かなえ

「もう…」

私にかまわないで！！」

良太郎

「でも…宝石が…」

かなえ

「まだ言ってるの！！  
いい加減にしないと  
警察呼ぶわよ！！」

## 第二章…ちよつと複雑〜3

良太郎

「え…？」

「そんなぁ…」

「〜〜〜〜  
デンライナーの中  
〜〜〜〜」

ウラタロス

「……で？」

何も言えずに  
帰ってきたの？」

良太郎

「…だつて  
完璧に嫌われ  
ちゃったし…」

モモタロス

「ったく!!」

しょうがねえ

野郎だなあゝ

良太郎!!

そんなこと

言われたんなら

ガツンと

やってやりや

よかったんだよ!!」

良太郎

「そんなこと…

出来ないよ…」

ウラタロス

「もう少し

女性の扱い方を

習った方がいいよね…

良太郎」

良太郎

「…なんだか  
わからなくなつて  
きたよ…」

本当に

かなえさんと

僕は…

結婚するのかなあ…？

絶対に無理な

気がしてきたよ…」

モモタロス

「心配すんじゃないよ  
良太郎」！

なるようにしか  
ならねえよ！！」

良太郎

「…それ  
何の気やすめにも  
なつてないよ…」

くプアくプアく  
プアくプアく

モモタロス

「ん？なんだ？」

ナオミ

「お知らせ  
いたしまゝす

デンライナーは  
ただいまより  
ターミナルに  
停車いたします

お降りのお客様は  
お忘れ物の  
無いように  
ご注意下さい」

良太郎

「ターミナル？  
分岐点？」

リュウタロス

「ワァ〜！」

すごい！

見てみて〜

金色の

キングライナーだ〜！！

すごいなあ〜

ワイワイ

いっぱい

遊んじゃえ〜」

モモタロス

「ケツ！！

いい気なもんだなあ〜！

おい！！ 良太郎！！

おめえも

いつまでも

しょうげてねえで

ターミナルの

温泉でも入って  
元気出せよう！  
」

良太郎

「うん…

そうするよ  
」

ウラタロス

「元気出しなよ」

良太郎

もし

どうしようも

なくなったら…

僕が力

かすからさあ」

良太郎

「…ありがとう  
ウラタロス…」

モモタロス

「…どうやら

着いたみたいだぜ」

オイ！クマ公！！

寝てんじゃねえ！！

置いて行っちまうぞ！」

キンタロス

「あああゝ！！

よう寝た！！

ん？…飯か？」

モモタロス

「なに寝ぼけ

てんだよ！！

このバカクマ！！

さっさと行くぞ！！」

ゝ  
ウィーン  
ゝ

オーナー

「み〜な〜さん」

モモタロス

「ワッ！！」

急に出てくんなよ！！

オッサン！！」

オーナー

「み〜な〜さん

タ〜ミナルに

降りる事は〜

許可出来ません！」

モモタロス

「ナニ〜？

何だよ！！！

オッサン！！」

オーナー

「緊々急々事態が  
発生しましたので

デンライナーは

ここのまゝまゝ  
発進いたします」

モモタロス

「な…なんだよ

その緊急事態ってのは？」

## 第二章…事件ですゝ1

オーナー

「私ゝはゝ

こゝこの駅長と

チャゝハン

バゝトゝルを  
するためにゝ

このタゝミナルに  
滞ゝ在ゝして  
いゝたゝところゝ

時空ゝ警察と  
時間ゝ警察の  
両ゝ方ゝから

あゝるゝ情報を  
聞ゝかゝさゝれゝ  
まゝしゝたゝ

モモタロス

「チャーハン

バトルの結果は  
どうだったんだよ

…どうせまた  
負けたんだろがヨォ」

オーナー

「いゝえいゝえ」

今回は」

勝算があつたのです  
が…

バトルを中断

せざるをえない

事」件」が

起」き」たのです」

良太郎

「なんですか？

その事件って？」

オーナー

「…おや？

おやおやおや」？

誰かと思えば、

確か…

良太郎君

でしたかね？

なぜ、

昔の良太郎君が

デンライナーに？

私は許可した

覚えは、

ありませんか？

こまりますねえ、

勝手な事を、

されては、

良太郎君

乗車券は、

お持ちですか？」

良太郎

「乗車券…？」

…あつ！

パスなら…

…ここに」

オーナー

「拝見」

いたします」

…なるほど

中国経由ですか…

だから」

リュウタロス君も

乗る車」して」

いるのですね」

リュウタロス

「いゝエイ」！

ボクは永久パス

あるもんねえ」

ウラタロス

「ところで…

オーナー  
その事件で  
なんですか？」

オーナー  
「それは  
とある女性の  
未来が」

何者かの  
手によって  
：

違う人生を  
生きていく  
形跡が  
あるそうです

みなさんも  
ご承知の通り

時間を旅する者は  
決して

その時間の出来事に  
かんしょうしては  
いません

例え 誰かが

亡くなろうと

誰かが罪を犯そうと

例え誰と結婚しようとな…

自然の流れを

なんびとたりとも  
変えてはいけない

たとえ

どんな事情が

あろうとも！！

かかわっては

いきません

それが時間を

旅する者の  
ルールです

私は

時空警察と  
時間警察の

両方からの  
依頼を受ける事に  
しました

犯人を見つけ出し

彼女を

元の時間に

戻さす！！

この

ミッションに

成功すれば…

このデンライナーを

警察署の

分署として

使っても

良いという

約束もしてきました

つまり！！

タイムコップ！！」

モモタロス

「…コップ？

…って

これの事か？

… あ！ カラだ

おゝいナオミゝ

コーヒー

おかわりゝ

風加

「お母さんなら  
ターミナルで  
降りたわよゝ」

モモタロス  
「ヨオゝ！

フウカゝ！

風邪は  
治ったのかよゝ？」

良太郎

「… 風加さんて

モモタロスと  
ナオミさんの  
娘さん…だよな？」

モモタロス

「お」

良太郎は

初めてだよな！！

フウカだ！

どおだあ

俺様に似て  
美人だろ」

## 第二章…事件ですゝ2

良太郎

「ナオミさん  
似だよね…」

風加

「でしょ」

はじめまして

良太郎さんですよ？

話はよく

両親から

聞いてますよ

はいコーヒー」

良太郎

「ありがとう」

モモタロス

「おいゝ！！

フウカ！！

コーヒ―

たのんだのは

俺だろうが！！」

風加

「……はいはい」

モモタロス

「ハイは1回！！

……ったく

どういう教育

受けてんだよ！！

……ったく

親の顔が

見てみてえゝなあ！！

なあゝ

……あ 俺か」

ウラタロス

「…おとうさん  
なにひとりで  
ボケてんの？」

モモタロス

「ちよつとまて！！

なにサラツと

俺様の事を

おとうさんって  
呼んでんだよ

てめえ

手え出しやがったら

ただじゃ

おかねえ！！

ウラタロス

「痛い痛い！！

…ちよつと先輩  
痛いよ！！

良太郎

「もお」

2人とも

ケンカしないで」

ちよつと」！

まだオーナーの

話が終わって

ないんだから」！

オーナー

「良太郎君

気にしなくて

いいですよ

その二人は年中

そうなんですから」

良太郎

「そうなんですか…

じゃ」

このままで……」

モモタロス

「……って

ほったらかしは  
ねえだろ……！

ほったらかしは……！！

……で……！！

ようするに

なにか……

オッサン

その犯人を

俺たちが

捕まえれば

いいんだよなあ……

で……

犯人のけんとうは  
ついてんのかよ？」

オナー

「……い……い……え……」

それはまだです

ただ…

わかつているのは  
被害者の女性…

確か…名前を…

『小田かなえ』さん  
…と  
いいましたかねえ…』

全員

「えええ…!!」

オーナー

「どうしました？」

良太郎君…そんなに  
ビックリする  
事ですか？

どうしました？

ウラタロス君？

顔が青ざめてますよ…？」

ウラタロス

「…いや

これは

生まれつきで…

で…でもその人が  
どんな被害を  
受けたんですか？

その女性は未来で  
幸せな暮らしを  
していないんですか？」

オーナー

「幸せな暮らし…？  
いいえ！

小田かなえさんは

犯罪を犯し

刑務所に  
入っていますよ」

ウラタロス

「マジで？」

でも…

2つの殺人は  
回避したはず…」

オーナー

「殺人…？」

資料によれば…

殺人はありませんね…

あるのは…

ひき逃げ

大麻

宝石泥棒の

3つの事件ですね」

良太郎

「…え？」

…人違いかなあ？

その人

花屋さんに

勤めていませんか？」

オーナー

「花屋」

勤めてましたね

でも捕まる前に

何らかの事情で

花屋をクビに

なっていますよ」

良太郎

「…かなえさんだ！！」

あの…

部屋から爆弾が

見つかったとかは…？」

## 第二章…事件ですゝ3

オーナー

「いゝいゝえゝ

そゝうそゝうゝ

爆弾ゝと言えは…

かなえさんが

捕まつた後に

隣の部屋が爆発して

アパートが粉々に

なっていますねゝ

まあゝ

不幸中の

幸いとても

いいでしょうか…」

良太郎

「そ…そうなんだ…

居なくて逆に

よかったんだね…」

オーナー

「そうそう」

花屋で

思い出しましたが…

こんな依頼も

受けてきましたよ」

良太郎

「DVD？」

何ですかこれ？」

モモタロス

「なんなんだよ！

オッサン！

口で言えよ！口で！！」

オーナー

「風加君…

これを再生」

して下さい

みなさんが  
見れるように」

風加

「はい」

良太郎

「……………あ

かなえさんの  
勤めていた花屋だ」

オーナー

「おやゝ？

良太郎君は

この花屋を

ご存知なのですかゝ

なら話は早い

でもゝ画面には

かなえさんは

出てきません

映っているのは…

彼…

そう、店長です」

良太郎

「……あ！！  
レジのお金を  
ポケットに……」

オーナー

「そお、です！！」

この画像は  
本来は店先を  
撮ってるはずの  
カメラですが、

なぜか、  
たまたま  
レジの方向に  
カメラが  
向いていて  
撮られた画像です

そして…

これは横領とか  
窃盗のたぐいの  
立派な犯罪です！！

…が

こゝれはゝ

普通の警察に

まかせておけば  
いいこと…

私に依頼が来たと  
いうからには…」

良太郎

「…イマジンだ！！」

モモタロス

「何ゝ！！

何いってんだよ！

良太郎ゝ！

そんなもん映って  
ねえじゃあねえか」

良太郎

「映ってるよ  
ほら！後ろの  
鏡に反射して…」

オーナー

「そうです  
よく気が  
つきましたね」  
良太郎君」

良太郎

「これは…  
またまた映って  
たんじゃなくて…

リュウタロスの  
おかげです

だから

リュウタロスと  
行って

このイメージを  
倒してきます」

オーナー

「なぜ

良太郎君が

この店に

行ったのかは

私には

関係の無いこと…

深く

ついきゆうする

気はありませんが…

…お氣をつけて」

良太郎

「わかりました

…行くよ

リュウタロス」

リュウタロス

「イエーイ！！」

良太郎「！」

派手に行くよ！」

良太郎

「派手……？」

いや……

バックダンサーは  
いないからね」

~~~~~

花屋

~~~~~

店長

「いらっしやませ」

R 良太郎

「お前」

イマジンと

契約したよね

《そ…そんな

いきなり聞いても

わからないよ》」

店長

「…イマジン？

あっ！！

あの怪物ですか？」

## 第二章…事件ですゝ4

R 良太郎

「答えは聞いてない!!」

《聞こうよ

リュウタロスゝ!!》

え？

…はゝい

じゃあゝ

今は憑いてない  
みたいけど…  
どうして？

どんな契約したの？」

店長

「なんだかねゝゝ

私が独りで

店にいたときにね

あの怪物が現れてね…

お前の望みを言え！  
つて言つてきて…

わけもわからず…

とりあえず…  
金持ちになりたい  
つて言つたら…

レジの金を  
ポケットに  
入れるつて  
言われてさあ…

そんな事したつて  
お金持ちに  
なつたわけじゃ  
無いのにさあ…

良太郎

「…ですよね

それがイマジンの

勝手な解釈なんです

《良太郎くボク  
まだしゃべりたい  
のに》

…ごめん  
ちよつとかわつて…

ところで…  
かなえさんは  
どうしてクビに  
なつたんですか…？」

店長

「クビ…？  
かなえさん？

…だれそれ？」

良太郎  
「…え？

…たいへんだ！  
もう過去が変わってる！

あの…  
この人に

心当たり  
ありませんか？」

店長

「…ん？

見覚えあるような…  
ないような…

…あ！！

昔々面接に…  
きたような…  
こないような…」

良太郎

「…つてことは  
クビになった過去も  
変わって…

面接に来たときの  
過去から

かわったんだ…

すみません

ちよつと

いいですか？

カードで…

………

これで

過去に飛べるよね

《いそげ》

良太郎お《》

（ （ （ （ （ （  
花屋 面接日  
（ （ （ （ （ （

店長

「いらっしゃいませ」

かなえ

「あの…

今日」

面接を受けに  
まいりました

小田かなえと  
申します

店長さんですか？

よろしく

お願いします」

店長

「あなたでしたか」

じゃ」………」

ザア」………」

」

」

ウツドイマジン

「死んでもらおうか——！！」

かなえ

「キャ〜!!」

良太郎

「まで〜！」

行くよ!

リュウタロス!!

変身〜!!

〜ガンフォーム〜

ガンフォーム

「エイ〜！」

(ド〜ン!!)

オマエ〜

倒すけどいいよね〜」

ウッドイマジン

「もう…」

押し倒されて  
ますけど…」

ガンフォーム

「答えは聞いてない！！」

（ドキュン！！）

わ…！！

何こいつ！！

カラダが木で  
できてる…！！  
」

ウッドイマジン

「クソ！！」

電王か…！！

少し遅かったなあ

残念だが

お前たちの未来は  
消えかけているぞ！

どんなにあがいても  
歴史は変わる

俺たちは…

無敵のチームだ

もう

ちがう時が

流れ始めている

未来は我々の  
手の中にある

おとなしく

消えてなくなれ!!

食らえ!!」

(ダダダダダダ  
ダダダダダダ)

ガンフォーム

「わっ!!

なにこれ?」

針?

…え?

∴  
爪楊枝？  
」

## 第二章…出た！…1

ウツドイマジン

「爪楊枝ではない！

ピツカーミサイルだ！…」

（ダダダダダ…）

ガンフォーム

「なんでもいいよ…！

答えは聞きたくない…！

お前…

もうジャマア…

（フルチャージ）

いくよ…

くらえ…！…！

（ドキュン）

ウッドイマジン

「…クソ！

木を使い

過ぎちまつたぜ…

覚えておけ！

おまえ達を…

あの未来には…

…行かせない！！

ラ…ンド…様！！」

（ザザザザア～）

ガンフォーム

「やった～！

勝った～！

《…リュウタロス

花屋にかなえさんを  
連れて行こう》」

花屋

良太郎

「店長さん!!」

店長さん!!

起きてください!!

店長さん!!」

店長

「ん

どうしたんだ?」

「私は?

「キミは?」

良太郎

「僕は

通りすがりです

それより

面接の人が来てますよ」

店長

「え？

面接？

ああゝ そうか

今日だったね

じゃゝこちらへ」

良太郎

「面接受けて

良かったですね

…頑張つて」

かなえ

「はい

ありがとうございます」

良太郎

「じゃ…」

~~~~~  
デンライナー
~~~~~

良太郎

「かなえさんは  
これで花屋さんで  
働く事にな  
ると思うよ

…でも

イマジンが  
かなえさんの面接を  
ジャマするなんて…  
なんでだろう？」

ウラタロス

「なんでだろうね  
今度イマジンに  
会ったら

たおす前に  
聞いた方が  
いいんじゃない？」

良太郎

「だよね……」

オーナー

「ともかく……」

これで花屋の件は  
解決しましたね

でわ

彼女が犯した罪……！

ま……ず……は……

ひ……き……逃……げ……事……件……！……！

これも何者かの  
手によって

事実とは違う未来に  
な……っ……て……し……ま……い……ま……し……た……

こ……れ……は……  
事件です……！！

本来なら……」

モモタロス

「ちよつと待った！

オッサン！！

ひき逃げ事件なんて

起きるはず

ねえじゃねえか！！」

オーナー

「おゝや？

モモタロス君は

何かゝご存知のゝ

ようですね

でわゝ

答えてゝいただき

ましようかゝ

なぜゝ

彼女の車の

ヘッドライトに

被害者の血がゝ

付いていたのかを」

良太郎

「オーナー

ヘッドライトに

血が付いて

いたんですか？

それは変です

モモタロスが

その男性と

話してる間に

かなえさんの車が

通り過ぎましたから……」

オーナー

「良太郎君

私が言っているのは

当たったか

当たってないか

でわなく～

なぜ～

ライトに

頭の血がゝ

付いていたのかが  
知りたいのです

普通 車のライトの高さから考えれば

当たるのは

腰か太ももの  
はずです

あゝやゝしいゝ

これもゝ

イマジンの

仕業かもゝ  
しれませんがねえゝ  
」

## 第二章…出た！…2

ウラタロス

「なるほど…」

変えたはずの

未来が…

また変わってしまった…

そんなことが

出来るのは…」

良太郎

「イマジン！！」

ウラタロス

「…だね」

モモタロス

「ヨッシャー！！」

そうとわかれば

遠慮はいらねえ――！！

イマジン相手なら

暴れたって

文句ねえよなあ――！

俺様が二度と悪さ

できねえように

ギタンギタンに

してやるぜえ――！！

行くぜ――！！良太郎――！！

ついて来い――！！

~~~~~

かなえのアパート前

~~~~~

ファイヤー

イマジン

「このドジ――！！

マヌケ――！！

腰抜け野郎――！！

お前が

死ぬほどの金儲け

したいって

願ったんだろうが!!

それを

しくじりやがって!!」

男

「ま…まってくれ!!

私はそう言った

かもしれないが…

交通事故なんて

望んでないし!!

そ…それにあれは

私がしくじった

わけじゃなくて!!

あ…赤い目の奴が

突然あらわれて

話しかけて来るから…」

ファイヤー

イマジン

「うるせえ!!」

ごちゃごちゃ

いいわけ

するんじゃないねえ！！

病院でベッドに

寝てるだけで

金が入って

くるんだからよ

車にあたる

くらいガマンしろ！！

俺様は

気が短いんだよ！！

いいか！！

これはお前のために

してあげてるんだぜ！！

それにこの車に

ぶつからなきゃ

意味がないんだよ！！

とりあえず

この車のライトに

お前の血がつけば…

契約完了だ！！

いくぞ！！！！」

M良太郎

「ちよつとまてよ！！  
止まったクルマに  
頭ぶつけるなんてよ」

お前えゝ相当の  
バカだなあ！！」

ファイヤー  
イマジン  
「誰だ！！」

…お前 電王か？

ウワサ通りの  
マヌケヅラだなあ！！」

M良太郎

「バカやる！！  
誰がヅラだ！！！！」

良太郎のこの髪は

本物だ！！

《モモタロス…

マヌケヅラは…

マヌケな顔って

意味だよ…》

…わ

わかってんだよ！！

良太郎！！

いちいち

突っ込んでんじゃねえ！！」

ファイヤー

イマジン

「そのバカさ加減…

お前…

モモタロスだなあ

ちょうど良かった

探す手間が

はぶけたぜ！！」

M良太郎

「ホオ」

俺様の事

知ってるみてえだなあ」

知名度あるのは

悪い気がしねえなあ」

ファイヤー

イマジン

「ああ」

有名だぜ」！

イマジン1の

バカだつてなあ」！！」

M良太郎

「なあに」！！

てめえ」

誰にケンカ

売ってたんだよ！！

吠えッラかくなよ！！

いくぞ！良太郎！！

く 変身！！」

く ソードフォーム

ソードフォーム

「俺！！ 参上！！

俺様の事を

知ってんなら

とくに前置きはねえ！！

最初から最後まで  
クライマックスで

行くぜ！

行くぜ！！

行くぜ！！！！」

## 第二章…出た！…3

ファイヤー

イマジン

「俺様は遊んでる

ヒマは無いんだよ！！

とつとと消えろ！！」

ソードフォーム

「うるせえ！！

消えんのは

てめえの方だ！！

おとなしく

やられちまえ！！」

（カンカン！！

キンカン！

カ〜ン！！ブ〜ン！！）

ファイヤー

イマジン

「そんな剣で

俺様が切れると

思ってたのかよー！！

これでもくらえー！！

ファイヤーー！！」

（ブオオ〜！！）

ソードフォーム

「アチツ！！アチツ！！

てめえ！！

ケツが燃えちまう

じゃねえか！！

（ブオオ〜！！）

アチツ〜！！

（ブオオ〜！！）

クソー！！

らちがあかねえー！！

良太郎！

デンバードで

広い場所に

移動するぜー！！

やい！！

火の玉野郎！！

俺様を黒こげに

したけりや

ついてこい！！」

ファイヤー

イマジン

「望むところだ！！

跡形もなく骨まで

焼きつくしてやる！！」

~~~~~  
廃墟ビル
~~~~~

ソードフォーム

「ここなら

遠慮はいらねえ！！

暴れたいだけ

暴れてやるぜ！！」

ファイヤー

イマジン

「何度もいわせるなあ!!」

俺様は遊んでる

ヒマは無いんだよ!!」

(ブオォ!!)

ブオォ!!

ブオォ!!)

ソードフォーム

「アチッ!!」

クソ!あの火を  
消さねえと

近づけねえ

《モモタロス:  
あれを見て》

アアン?

…なるほど

そんじゃ

俺様の

必殺スペシャル

見せてやるかあゝ!!

やい!!

この火の玉野郎!!

いいか!!

今から俺様の

必殺技を

見せてやるからよ!!

そこを動くんじゃねえぞ!!」

ファイヤー

イマジン

「バカが…

お前の剣は

すでに見切っている

そんな剣さばきで  
俺様に勝てる  
わけがない!!」

ソードフォーム

「ほざいてる!!」

行くぜ!!

(フルチャージ)

俺の必殺技!!

パート119!!

オリヤ!!」

(ブン…)

ファイヤー

イマジン

「…?

どこ狙ってたんだよ!!

お前、相当バカ…

ん?…雨?」

(ザザザザ〜!!!)  
(ジュワ〜!!!)

ソードフォーム

「狙ったのは

貯水タンクだ!!!

バカやる!!

ザ・火の用心!!!

…それにしても

火が消えたら

マッチみてえな

野郎だなあ…!

これで最後だ!!!

(フルチャ〜ジ)

俺の必殺技

パート3〜!

どりゃ〜!」

(ガガーン!!  
バリバリバリ!!)  
)

ファイヤー  
イマジ  
ン  
「ゲオオッ!

ランド様!!...」

(ドガガーン)

ソードフォーム  
「っ楽勝だなあ!!

《また...  
ランドって言った...》  
」

## 第二章…ウラハラ…1

~~~~~

デンライナー食堂車

~~~~~

モモタロス

「あゝスッキリしたぜえゝ！」

オイゝ！！

フウカゝ

コーヒー入れてくれゝ！」

風加

「はゝい」

良太郎

「モモタロス

さっきのイマジンも…

ランド様って

言ってたよね？」

モモタロス

「ん？」

そうだったのか？

ああゝ

おぼえてねえなあ

なんせ俺様は

暴れるのに

真剣だったからよゝ  
聞こえなかったぜゝ

…真剣

ソードフォーム

だけに…

真剣ゝ

なんてなあ…」

良太郎

「イマジンの

ボスかなあ…？」

ウラタロス

「かもしれないね  
でもまあ」

敵のボスだとしても

かなえさんの未来を

元の時間に

戻すのが先

…だね

そのうちイヤでも

出てくるんじゃないかなあ」

…とりあえず

後2つの事件を

解決するのが

先だと思つよ

良太郎」

良太郎

「そうだね

次は…」

ウラタロス

「じゃ」

一緒に釣りでも  
行きますか」

オーナー

「……………」

「……………」

アパートの1Fの部屋

「……………」

男

「……………」

ウォーター

イマジン

「お前の望みは  
わかった！

その願い

かなえてやろう

お前が2階の女と  
仲良くなる  
きっかけを  
作ればいいんだな？

…5分後に  
アパートの裏側に  
来い！

そこで…  
お前の望みを  
かなえてやろう」

~~~~~  
アパートの裏
~~~~~

良太郎  
「……は…」

ウラタロス  
「前に僕たちが  
来た時間…だね」

良太郎

「また同じ事をするの？」

ウラタロス

「…いや

ここは

なりゆきを

見守るだけ…だね」

良太郎

「なりゆき？

どういう事？」

ウラタロス

「来たよ！！

良太郎 隠れて！！」

良太郎

「わ!!」

… 何で隠れるの？

… あれ？

あれは僕たちだ…」

ウラタロス

「そっちじゃなくて

ベランダから

目をはなさないで」

良太郎

「ベランダ？

あ…！

シーツの影から

手が…

イマジンだ！」

ウラタロス

「…だね

そして男が現れて…

イマジンが下着を

落として…

男がそれを

拾い上げてる時に

植木鉢が落下…

さっきの僕が

落ちてきた

植木鉢を

釣り上げて…

…きつと

ベランダの

イマジンの体が

植木鉢にふれて

落ちたん…だね

しばらくすると…

良太郎が植木鉢を

かなえさんに

手渡して…

怒られて…」

良太郎

「やっぱり…」

怒られるんだ…」

ウラタロス

「まあ」

後っでどうにでも  
なるなる」

それより…良太郎

あれをみて

かなえさんが

植木鉢をベランダに  
置きに来た

あれをまた

落としてしまえば…

大麻は発芽しない」

## 第二章…ウラハラ〜2

良太郎

「なるほど…  
楽勝だね」

ウラタロス

「…だね

それじゃ〜

えい！

グイッと

（ガシャン）

一本釣り成功〜

…だね」

良太郎

「これで

かなえさんの

大麻の罪は

消えたんだよね

後は…

あのイマジン

を倒さなきゃ…」

ウラタロス

「だね」

このまま

ほつといて

違う事件を

起こしたら

後々やつかいだし」

それじゃ」

行きますか

良太郎」

くくくくくくくく

男の部屋

~~~~~

コンコン

男

「はい…

あ…

まだ… なにか？」

U 良太郎

「なあに？」

やっぱり…

気が変わってね…

ちよつと失礼…」

男

「ちよつと！

勝手に入らないで
下さい！！

何ですか！！

あなた達は！！

け…警察呼びますよ…！！」

U良太郎

「…警察」
どうぞ

よんでもらって
けっこうだね

警察が来たら
この壁一面に
貼られた

かなえさんの写真は

どう説明

するんだろか？

…さてと

イメージと

どんな契約を
したのか

話してもらおうか？」

男

「…イマジン？
契約…？」

な…

何のことですか？

僕には…

何のことだか…」

U良太郎

「甘いなあ」

僕を相手に…
シラウオ切れると

思ってたのかなあ」

かなえさんの
下着を手に入れる…

そんなのが
契約なわけないし」

早く口を
割らないと…

三枚におろされて

痛い目みるのは…

《变身！！》

お前だ！！」

（ガシャン！！）

（ビュー！！
グサッ！！）

ウォーター

イマジン

「グワッ！！

貴様！！！！

なぜわかった！？」

ロッドフォーム

「なあゝに

…僕の後ろに

立つからさ

僕には後ろにも

足の裏にも

目があるんだよゝ

なゝんてね

《ウオの目？》

お前がここに
いるって事は…

まだ契約は
完了してない
って事…だね

それじゃゝ

場所をかえようか？

僕に釣られて
ついてこい!!」

(シュ)

グイッ

ウォーター

イマジン

「イテテテテテ」

~~~~~

海岸

~~~~~

ロッドフォーム

「ここなら」

お互い遠慮なく
戦える…だろ」

ウォーター

イマジン

「バカめ！！
海が得意なのが
お前だけだと
思っなよ！！」

ロッドフォーム
「思ってないよ

敵に塩を
送っただけ

…だね

勝のは僕だからね！

エイッ！
」

ウォーター
イマジン
「何度も同じ手を
食らうか！！」

（バシャー）

ロッドフォーム

「あれ？」

《イマジンが

水になった！！》
「

第二章…ウラハラ〜3

ウォーター

イマジン

「ヘッ！！」

おどろいたか！！

俺様の体は

水で出来てんだよ！！」

ロッドフォーム

「なるほど」

なら とつと

海に流してやろうか」

いや…

そんなことしたら…

環境汚染になっちゃうね」

ウォーター

イマジン

「ほざくな!!」

海のもくずとなるのは

きさまの方だ!!

これでも食らえ!!

ショットガン

ウォーター!!」

(バババババア～
ババババババア～
ババババババア～)

ロッドフォーム

「ちよつと…

痛いよ～

この水の弾…

よけるより～

全弾 打ち返して
みようかあ～

《そんなこと
できるの?》

大丈夫

僕に任せて

欲しいな

いくぞ！！！」

（ババババババ！！）

（ダダダダダ！！）

（ババババババ！！）

（ダダダダダ！！）

ウォーター

イマジン

「こしやくな！！

これならどうだ！！

メガウォーター弾！！」

ロッドフォーム

「わぁ……！！

海水も利用して

巨大な水の玉が…

たいへんだ〜!!

……なんてね

玉を作るあいだ
防御がおろそかにな
ってるよ!!

(フルチャージ)

エイッ!!」

(シュッ
グサッ)

ウォーター

イマジン

「なに!!?」

ひ…ひきょうだぞ!!」

ロッドフォーム

「ひきょう？

…よく言われるよ

いくぞ！！ トォ！！」

（バァーン）

（バシャーン）

ロッドフォーム

「あれ？

手応えが…」

ウォーター

イマジン

「バカめ！！

俺様を甘くみるな！！

俺様は不死身だ！！」

ロッドフォーム

「のれんに腕押し

ぬかに釘…

…水に蹴り

まいったなあ…

水…水…水…

《どうしよう
モモタロスとかわる?》

いや…

相手は水…

先輩の剣でも

オノでも

ガンでも

無理…だね

水…なら…

そうだ!!

フウカちゃん…!!」

風加

「？はい？」

ロッドフォーム

「今夜」

食事を「ごちそう
するからさあ」

ちよつと

手伝ってもらって
いいかなあ？」

モモタロス

「なに！！」

風加

「私が？」

いいですよ」

あ……

オーナー少し
外に出てきても
いいですか？」

オーナー

「…いいですよ」

少しの時間なら…

許可しますよぉ」

モモタロス

「ちよつと待った！！

おっさん！！

なに勝手に

許可出してんだよ！！

俺様の娘だぞ！！

風加！！

最初に俺様の許可を
とるのが先だろ！！！！

何考えてんだよ！！
まったく！！」

風加

「バイト中なんだから！！
オーナーに許可を
とるのが
当たり前でしょ！！
お父さんは
関係ないです」

（ベエッ！！だ）

第二章…ウラハラ〜4

モモタロス

「てめえ〜!!」

なんだその態度は!!

そんな娘に育てた

覚えはねえぞ!!」

風加

「じゃあね〜」

モモタロス

「じゃあね〜」

…じゃねえぞ!!

まちやがれ〜!!」

キンタロス

「まあまあ〜」

ええやないか

モモの字！！

あの子を

育てたんは

ワシらや！！

間違いない！！」

（コキッ）

モモタロス

「なに！？」

キンタロス

「あんなイマジンに
簡単に負けるような
子には育ててない！！

まあ」

落ち着いて

見守ってあげてたら

ええがなあ」

モモタロス

「バカクマ!!」

のんきな事

言ってんじゃないねえ!!

誰も憑依しねえで

どうやって

変身すんだよ!!」

キンタロス

「あ!!」

ZZZZZZ…」

モモタロス

「寝るな!!!!」

(バシッ)

…こうなったら
俺様が」

リュウタロス

「まって〜!!」

ボクが行く〜!」

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

デンライナードア

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

風加

「海岸の上空か…

飛び降りた方が
早いわね

トオ〜

変身!!

…あれ〜?

あ…

憑依されてない

キャ～～!!」

リュウタロス

「大丈夫だよ!!」

今ボクが」

(ギョーン)

????

「下がっておれ!!」

(バーン!!)

~~~~~

デンライナー食堂車

~~~~~

リュウタロス

「わああ!!」

はじかれた〜！

なんで？」

モモタロス

「バカやろ〜！！
何やってんだ！！

…どうなってるだ！！？」

リュウタロス

「わかんないよ〜

あれ〜？

…これ？ハネ？」

モモタロス

「なに〜！！
まさか！！！」

近くを飛んで
いたので

憑いてみた…

なかなか～

よき発育をしておる

これならば

私の激しい動きにも

ついてこれよう～

されば～

モモ娘…

まいろうか～

《は～い 変身！～！》
「

（ブラストフォーム）

ブラストフォーム

「降臨～

満を持して…

く 参上！！

《おや…？

モモ娘が表に…

私より

強いという事か？》

そうみたいねく

…で

ウラさん

私は

何をすればいいの？」

ウラタロス

「すごいねえく

ジークをおさえ込むなんてく

やって欲しいこと？

なにく

簡単なことだよく

ちよつと耳を…

ゴニョゴニョ

ゴニョゝ
」

ブラストフォーム

「なるほど…

わかったわゝ

じゃゝ私は空から」

第二章…ウラハラ〜5

ロッドフォーム

「…空…？」

《飛べるの？》
「

ブラストフォーム

「飛べるわよ

《私の翼があれば…》

ジーさんのは

ジャンプでしょ？

《ジ…ジーさん？

それでは…まるで
年寄りではないか…！

『ク』ぐらい付ければ
よかるうに…！《

はいはい…

じゃ～

ジークさんの翼は

長時間

飛べないでしょ～？

私には

これがあるのよ」

（ガシャン

ガシャン

ガシャン

バーン！）

ロッドフォーム

「…お～！

《な…なにあれ？

デンガッシャの

ソードモードを

アックスから
左右に広げたら

スケボーみたいに
変形した…」

しかも浮いてるし…

すごいねえ

フウカちゃん
それどうしたの？」

風加

「買ったのよ
通販で」

じゃー行くよ！

ゴー…！」

（ギュ〜ン）

ロッドフォーム
「すごいねえ

未来は
なんでもあり
…だね？」

ウォーター
イマジン
「お前たち！！

オレの存在を
忘れてないか？
」

ロッドフォーム
「あゝ！

いたの…

ごめんごめん

あわてなくても

ちゃんと
日干しにして

あげるからさあゝ」

ウォーター

イマジン

「なにをぬかすか!!」

お前こそ

切りきざんで

魚のエサに

してやる!!

覚悟しろ!!」

(ビューン)

ロッドフォーム

「おゝっと

覚悟決めるのは
どっちかなあゝ

頭上注意…だね」

ウォーター
イマジン
「頭上…？」

ブラスト
フォーム
「食らえ！！
ボードガン！！」

（ズキュン！！
ズキュン！
ズキュン！）

ウォーター
イマジン
「グアッ！！」

ロッドフォーム
「おっ！
先っちょから
レーザーガン」

ブラストフォーム

「ボードカッター!!」

(シャキーン)

(グサツ)

ウォーター

イマジン

「ウゲツ!!」

ロッドフォーム

「オゥ！」

サイドのアックスも

巨大化するんだ!!」

ブラストフォーム

「フライング

ソード!!」

ウォーター

イマジン

「ギア〜!!」

ロッドフォーム

「なるほど」

ソードも飛ぶんだ」

ブラストフォーム

「これでどうだ〜!!」

アックス乱舞!!」

ウォーター

イマジン

「イテテテテ〜!!」

ロッドフォーム

「懐紙の花吹雪

…だね」

ブラストフォーム

「乌拉さん！

そろそろ

とどめをさす？」

ロッドフォーム

「いいね」

それゝ最後は

ロッドモードの……」

ブラストフォーム

「……？」

無いわよ」

ロッドフォーム

「……え？」

ブラストフォーム

「だって……」

ロッドモードって……

ボードに

釣りの機能は

いらな^いもの^ゝ
「

ロッドフォーム

「だ^ゝよ^ゝね^ゝ!!」

第二章…ウラハラ〜6

ブラストフォーム

「まあまあ〜」

そんなに

落ち込まないで〜」

ロッドフォーム

「これが

落ち込まずに

いられますか…

僕ってやっぱり

影が薄いのかなあ〜

《ウ…ウラタロス

大丈夫だよ！

ウラタロスは…

つ…釣りが出来て

カッコイイし

ウラタロスに釣りで

勝てる奴は…

他にいないと思うし…

ロ…ロッドモードは

ウラタロスの

専用でいいんじゃないかなあ…」

『

良太郎

何のなぐさめにも
なつてないよ

苦しいなぐさめは
いらない…

しゃべれば
しゃべるほど…

アワより
軽くなるからね…

さてと
落ち込んでても
しょうがない…

とつと

あいつをやっつけて
帰りましょうか」

（フルチャージ）

ブラストフォーム
「…だね」

ウォーター

イマジン

「きさまらの
攻撃など！！
虫にさされた程度だ！！」

ロッドフォーム

「はいはい…」

そうでしょうね〜

でも

これならどうだ！！

エイッ！！」

（シュ〜

グサッ

ウォーター

イマジ

「グアッ!!」

…バカめ

同じ事をして…」

ロッドフォーム

「トウー!!」

(バァーン!!)

(バシャーン)

ロッドフォーム

「今だ!!」

フウカちゃん!!」

ブラストフォーム

「OK〜!!」

ファンモード!!

ダブルファン!!

(フルチャージ)

ビッグハリケン!!

エ〜イツ!!

(ビュユ〜ン!!)

巻き上げる!! 竜巻!!

飛ばせ!!

太陽に向かって!!」

(ビュユ〜ン!!)

ウオーター

イマジン

「な…なんだこれは!!

し…しまった!!

体が元にもどらん!!」

(ビュユン…!)

~~~~~

宇宙

~~~~~

ウォーター

イマジン

「暑い

…暑い!!

か…体が…

水が…

蒸発していく…

グオオ~~~~!」

(ジュン…)

~~~~~

海岸

~~~~~

ロッドフォーム

「日干し完了
…だね」

~~~~~  
デンライナー食堂車  
~~~~~

モモタロス
「お疲れさん!!」

フウカ!
俺様〱特製コーヒー
いれといてやったぜ〱!!」

風加
「いない」

モモタロス
「…え?なんで?」

ウラタロス

「反抗期…だね？」

モモタロス

「なんだよ

それ！！

なんでだよー！！」

ウラタロス

「しょうがないよー

お父さん…

年頃の娘は

父親を

毛嫌いするもんだよ

時間がたてば…

そのうち

なんとかなるよ…」

モモタロス

「…年頃かー

クウー

そのうちか…

……ん？

カメ！！てめえゝ

またお父さんって
よびやがったな！！

ゆるさねえゝ！！

今日こそ

カメ汁にしてやる！！」

第二章…順序…1

ウラタロス

「ちよつとまつてよ
先輩」

言葉の綾だよ

ア…ヤ！

フウカちゃんが

先輩の子供って事は

僕たちの

子供みたいな

気持ちか

あるからさあ

…つい」

オーナー

「み…な…さん！！

はしゃいでる

場…合…じ…や…

ない…と

思いますよ…

これまでの

イマジンとは違い…

砂でなく

水になるイマジンが

あらわれたん
ですからね…

この先…

どんな属性の

イマジンが…

あ…ら…われるか…

気を抜かないように
しなければ…

（コテ…）

…いけませんねえ…

でわ…」

モモタロス

「…あのおっさん
旗が倒れたら
ああやって車両を
出ていくけどよ…」

…チャーハン少し
残すって…

教育上
悪いんじゃない
ねえのかよ…」

ウラタロス
「…だね」

風加
「大丈夫よ
残ったのは
次のチャーハンに
まぜてるから」

ウラタロス
「…マジで?？」

モモタロス

「やるじゃねえか
フウカ！！」

風加

「お母さんの
時代からやってる
ことだから」

ウラタロス

「でもそれって
不衛生じゃ……」

風加

「大丈夫よ
あれはオーナーの
チャーハンにしか
まぜてないし」

火をとおすから」

お腹もこわして

なさそうだしゝ

昔から…

バレてない
みたいだよ」

ウラタロス

「ならいいかゝ

さてと…

次はゝ宝石泥棒

…だね

ここにも

イマジンが

からんでいるはず

あやしいのは…

店員

2人のチンピラ
ひょっとしたら…

彼氏もグルかも
しれないねゝ」

良太郎

「だとしたら…」

イマジンは4体…」

モモタロス

「イマジンが

相手じゃ」

俺たちが戦うしか
ねえよなあ」

良太郎1人じゃ」

チンピラに

からまれても

何の抵抗も

できなかったしよ」

良太郎

「あ…あれは

その気になれば…

僕だって…

反撃できたけど…

あの時はたまたま

お巡りさんが

来たし…」

モモタロス

「たまたまじゃ
ねえよ!!」

良太郎

「…え？」

ウラタロス

「あれは僕が
よんだんだよ」

モモタロス

「そのあと
チンピラが
こけたのは…」

俺様が足を

ひっかけてたんだよ!!」

良太郎

「…え！！

そうだったんだ…

偶然だと思つてたよ」

モモタロス

「良太郎！！

世の中には

たまたまの

偶然なんて

ねえんだよ！！

誰かが意識して
行動しなきゃ

どんな偶然も
おこらねえ！！

タネをまかなきゃ

花は咲かねえゝ

犬も歩かなきゃ

棒にあたらねえ！！

誰かがタナに

ボタモチを置かなきゃ

落ちてこねんだよ!」

第二章…順序…2

良太郎

「…それは

そうかも

しれないけど…

僕は運がいいんだと
思ってたよ…

そっか…

モモタロスたちが
助けてくれてたんだね

…僕は本当に
運が悪いんだね…」

モモタロス

「落ち込むなよ

良太郎」

運が悪い代わりに

俺たちと

出会えてんだからよ」

それで

トントンだろが

そお

くよくよすんなって」

ウラタロス

「そうだよ

良太郎

幸せか不幸せか
なんて

気持ちの持ちようで
どうにでも
なるんだから」

キンタロス

「人間万事

塞翁が熊…って

やつやなあ

間違いない!!」

(コキッ)

ウラタロス

「キンちゃん

熊…じゃなくて馬」

モモタロス

「バカクマ〜!!」

クマが出てくる

ことわざなんて

ねえんだよ!!」

(バシッ)

キンタロス

「何でや!!」

あるやないか!!」

熊の上にも三年」

モモタロス

「昔話しの金太郎か!!」

(バシッ)

キンタロス

「まだある!!」

一寸先は熊

二階から熊

瓢箪から熊

ぬかに熊

熊にも衣装

熊った時の紙だのみ

のれんに熊押し

犬も歩けば熊も歩く

となりの芝生は熊…

どや!!」

モモタロス

「どや!!じゃねえだろ
バカクマッ!」

そのことわざは何の
教訓があんだよ！！

隣の芝生が熊だと
落ち着いて
住めねえだろうが！！」

キンタロス
「隣の芝生は
ツよく見える
って意味やないんか？」

モモタロス
「…もついい
クマ…
お前あっち行つて
寝てろ！！

どつちにしろ
おめえの出番は
無くなつたんだからよ」

キンタロス

「…無く？
なく？」

泣けるで！！

なんでやモモの字

爆弾犯は
捕まったんか？」

モモタロス
「捕まってねえよ

犯人も捕まってねえけど

良太郎の嫁さんも
捕まらねえ」

どうして捕まらねえか知りてえか？

…カメ！！

説明してやれ！！！」

ウラタロス

「エッ！！

ぼ…僕…？

…まあいいけど

え…つまり…

一連の事件の
きっかけは…

交通事故で

警察が

家宅捜査した時に

裏庭で死んでいる
住人がみつき

部屋から宝石が
見つかり

押し入れから
爆弾の部品が
見つかった

勤め先の
花屋への聞き込みで

売り上げ金の横領の
罪をきせられた…

でも…

きっかけの
交通事故が
無くなっただし

裏庭にも死体はない

警察がわざわざ来て
押し入れを
さがす事もないし

ほっとしても
爆弾犯は
普通に警察に
つかまるだろうし…

だから…
キンちゃんの
出番無し

…まあ…
そのほうが

かなえさんに
嫌われなくて

すむしゝ

まさに…

果報は寝て待て

…だね」

第二章…順序…3

モモタロス

「どうだ!!」

わかったかクマ!!

キンタロス

「zzzzz」

モモタロス

「人の話の途中で

寝るな!!」

(バシッ)

ウラタロス

「いや…先輩」

…人じゃないし

…とにかく
宝石泥棒を
解決すれば…

かなえさんは
無罪放免
一件落着く
…だね」

良太郎
「…本当に
そうなのかなあ…？」

なにか…
大事なことを
見落としている
気がする…」

風加
「はい
良太郎さん」

良太郎
「風加ちゃん

…？

これは何？」

風加

「ターミナルで
オーナーに渡された
事件のファイルです

これを読み返せば
何かわかるかなあ
」
「

良太郎

「ありがとう

…
…
…

… かなえさんの
犯罪ファイルには

3つの事件以外は
書いてない…

花屋の事件は
防犯カメラで
解決するし…

爆弾が
爆発した時は

かなえさんは
留守だし…

…？

留守？…留守？」

ウラタロス
「どうしたの？
良太郎？」

良太郎
「これって…

もし かなえさんが

事件を

おこしてなくても…

留守なのかなあ？」

ウラタロス

「それは」

どうだろう？

日曜日の昼だし

いる可能性は有り
…だね」

良太郎

「…先に爆弾から
処理した方が
いいんじゃない
かなあ…？」

ウラタロス

「時間の

流れ的には…

さつき

キンちゃんが
行った時間は

宝石泥棒より
前だけど…

爆発するのは
宝石泥棒より
ずっと後だし…

デンライナーで
爆発の前に行けば
いつでも間に合うよ
「」

良太郎

「……
…そうだけど…」

ウラタロス
「そんなに
気になるんなら

爆弾ごと処理しに
行きますか」

良太郎

「本当に？」

ありがとう

ウラタロス」

ウラタロス

「いや」

僕のいちぞんでは
決めれないけど」

オーナーの

許可が出たからさあ」

良太郎

「オーナーの？」

ウラタロス

「さっきドアを

少しだけ開けて

オーナーが
のぞいててね〜

コクンって
うなずいてたからさあ〜

オーナーの顔は
半分だけでも
…存在感あるよね〜」

モモタロス
「なにが存在感だよ！！

不気味な
だけじゃねえか〜！！

おい！ 良太郎〜！

クマ公より
俺様と行こうぜ！！

部屋のカギ
開けるぐらい

俺様にも
出来るからよ〜！！」

キンタロス

「ZZZ

開ける？

出来る？

…なける？

泣けるで！！

よっしゃ！！

良太郎！！

この俺に
まかせとけ！！」

モモタロス
「わっ！！

クマ！！

てめえは！！寝てろ！！」

第二章…順序…4

良太郎

「やめてよ」
2人とも

とにかく…!!

目的は爆弾処理

時間は…

さっきの時間で
いいと思う

風加ちゃん

行き先を
あのアパートに」

風加

「了解」
時間は…

このカードだね？

OK

変更してきまゝす」

モモタロス

「ケツ！！」

どう考えても

俺様の方が

適任だと思っけどよゝ」

ウラタロス

「先輩ゝ

ここはキンちゃんと

良太郎にまかせて

最後の事件で

暴れたいだけ

暴れればいいんだしゝ」

モモタロス

「カメ！！

おめえに

言われなくても

俺様は

暴れたい時は

暴れるんだよ！！

クマ！！良太郎！！

さつさと

爆弾処理して

きやがれ！！！！」

キンタロス

「あっという間に

終わらせてきたる！！

間違い無い！！」

(コキッ)

~~~~~

かなえのアパート

~~~~~

良太郎

「さつきより

少し早い時間だね…

まだゴミは

かなえさんの

部屋の前には無い

今なら隣の男は

部屋に

いるはずだよね？

キンタロス

男の部屋に

行ってみよう」

キンタロス

「ほな！

ちやつちやと

終わらせて

帰るでえゝ！！」

（コキッ）

隣の部屋の前

ドンドンドン！！
ドンドンドン！！

ドンドンドンドン
ドンドンドン！！

男

「うるさいなあ！！」

ちゃんとチャイムが
あるんだから
チャイムならせよ！！」

K 良太郎
「チャイムって
なんや？

《ドアの横にある
ボタンだよ》

あ……！！
いやすまん！！

ほなもう一回！！」

男

「何でだよ!!」

もう出てきてる
だろうが!!

誰だよお前!!

何だよ!!

その派手な着流しは!!

新聞の勧誘なら

お断りだ!!

てか着流しで

新聞の勧誘なわけ
ねえだろ!!

K 良太郎

「なんやこいつ?

《一人でボケて
突っ込んでる...》

とにかく!!
部屋にあがらせて
もらうで!!」

男

「なんでだよ!!
なんの権限が
お前にあるんだよ!!

入ってくんなよ!
入ってくんなよ!!

警察呼ぶぞ!!」

K 良太郎

「警察に來られたら困るのはお前やろ

こっちは

急いどるんや!!」

(ドン!!)

(ガンガラ
ガッちゃん!!)

男

「痛てゝ！」

K 良太郎

「手荒なまねは
したくはないなあゝ」

男

「してるだろゝ！」

K 良太郎

「お前はイマジンと
どんな契約したんや？」

男

「イマジン？

契約？

なんだよそれ？

…？

あの怪物の事が…？」

K良太郎

「それや！！」

その怪物に

何を願った？

そいつは

今 どこにおるんや？」

第二章…初めての再会…1

男

「あの怪物は…
もういねえよ!!」

願い事言ったら
どっからか
こんなに爆弾
集めてきててよ

気づいたら…
あいつは
姿消してたんだよ…」

K 良太郎
「それは…

《きつと
過去に飛んだんだ!!
キンタロス彼に
カードをあててみて》

よっしゃゝ

こおかあゝ」

男

「痛てえゝよ！
なに髪に
ねじ込もうと
してんだよ！！」

K 良太郎

「ん…？」

これは…

《この日付は
過去じゃなくて…
未来だ！！》

お前ゝ！！

この日付は
なんや？」

男

「日付？

…？

あ…

爆弾の

爆発する日だ…」

K 良太郎

「なに？

お前が願ったのは
何や！？」

男

「願い？

それは…

…世界征服」

K 良太郎

「なに？」

男

「いや…

どんな願いでも

いいって

言うからさあゝ

ちよつと…

デカすぎかなあゝと

思ったけどさあゝ

本当なら

町内征服でも

いいんだけど…

でもいいじゃん

夢はデカイ方が」

K良太郎

「アホやなあ…

やめとけ！！

おまえは

世界征服できる

器やない！！」

男

「そんな事
やってみな…」

(グイッ)

K良太郎

「間違いない!!」

(コキッ!!)

男

「はい」

K良太郎

「わかったら

この爆弾は処分や!!

《…キントロス

爆弾の解体

したことがあるの?》

ない!!」

(コキッ!)

男

「あの…さ

これ組み立て式で…

まだ一個しか

できてないんだよね…

バラバラな時は
危険は無いつて
書いてあるけど…

組み立てたら…
分解するのは…

やめた方が
いいんじゃない
かなあ…と」

K 良太郎

「《そうだよ
キンタロス

なにもここで
分解しなくても…

デンライナーで
安全な所に
運んでからでも…」

良太郎が
そうしたいなら

それでも
オレはかまわん」

男

「良太郎…？」

俺は三村だけど？」

K 良太郎

「こつちの話や…！
お前には関係無い…！」

男

「…はい」

K 良太郎

「《もうすぐ
時空がつかなくなる
時間だから…

トイレのドア開けて
デンライナーに
積み込もう》

せやなあゝ

おいお前!!
もうすぐ
トイレのドアが
開くから

このガラクタ
運び出せ!!」

男

「?…え?」

K 良太郎

「…何でもええから

言われた事したら

ええんや！

このガラクタ全部

運び出すんや！！」

男

「…え？ はい…」

K 良太郎

「《そう言えば…

もうすぐ

かなえさんが

帰ってくるはず…》

ん…？

隣のドアが

開いた音がした

《…帰って来たんだ

今回は会わずに
帰れそうだね」

それは間違い無い！！」

（コキッ！）

（…ピッ）

第二章…初めての再会…2

K 良太郎

「《なに今の…?》

ん…?

《ピツって

鳴ったよ?》
」

男

「おまえ〜!

そのボタン

押したのかよ!〜!
」

K 良太郎

「どうやら

そうみたいやな〜
」

男

「わあゝ！！！」

K 良太郎

「あ…」

あいつ逃げよつた！！

までゝ！！

《待つてキンタロス！！

追うより その爆弾

なんとかしないと！！》

せやな！

よっしゃ！！

オレに任せとけ！！

《わかるの
キンタロス？》

さっぱりわからん！！

でもこんなは

線を1本切れば
止まるはずや!!

このフタ開けたら…

(バキッ!!)

…あ
あかん!!

線が10本以上あるがな!

《え〜!
どうしよ〜!!!!》

数字もだんだん
減っていきよる!!

3 5
… 3 4
… 3 3
…

《カウントしてる
ばあいじゃないよ!!》

すまん!!

こうなったら!!

…ZZZ

《寝てる場合じゃないよ!!
早く!! かなえさんを
助けないと!!》

よっしゃ!!

この壁を!!

(ドバン!)

~~~~~  
かなえの部屋  
~~~~~

かなえ
「キヤ~~~~!!」

K良太郎

「じゃまするで〜！

くわしい話は後や〜！！

（グイッ）

オレを信じて

だまってオレに
ついて来い！！

《キンタロス時間だよ！！！

そのドアを！！！》

行くで〜！

オリヤ〜！！

~~~~~

デンライナー

~~~~~

K良太郎

「よっしゃ〜！！

まにおうたな〜！！」

(ドカ〜ン!!!!)

(グラグラグラ)

かなえ

「キャ〜!!」

K 良太郎

「《わ〜!!》」

(ゴロゴロゴロ!!)

良太郎

「痛て〜」

キンタロス

「なんやあの音は!!」

良太郎

「さっきの爆弾かな？

でも…

こつちの世界で
爆発してみたいな
衝撃が…」

かなえ

「なにこれ？

…ここはどこ？」

良太郎

「…あ

ごめんなさい

かなえさんは

ケガ無いですか？」

かなえ

「…？

あなた誰ですか？

どうして私の名前
知ってるんですか？」

良太郎

「え？…え？」

あつー！そうか…

この時間の

かなえさんとは

初対面なのかなあ…？

あの…

僕…野上良太郎って
います

こっちは…

キンタロス

僕の仲間です」

キンタロス

「危なかったな
ねえちゃん！！」

かなえ

「ね…ねえちゃん

… いたい

何が起きたんですか？」

良太郎

「あの…

くわしい話は…

食堂車で…」

かなえ

「食堂車？」

良太郎

「こっちです…」

~~~~~

食堂車

~~~~~

モモタロス

「おゝ！良太郎！！

早かったなあ！！」

良太郎

「ただいま」

かなえ

「……え？」

……コスプレ？」

第二章…初めての再会…3

モモタロス

「誰が！！」

コスプレだア〜！！」

良太郎

「待つて〜！！」

モモタロス！！

かなえさんは

まだこの状況を

理解して

ないんだから…」

モモタロス

「だからって

コスプレは

ねえだろ！！

コスプレは！！」

良太郎

「だから

落ち着いて!!

今から事情を

話すから」

かなえ

「ごめんなさい

でも…何で私は

電車?に

乗ってるんですか?

さっきまで

部屋にいたのに…

突然壁が壊れて…

着物姿の人が現れて…

トイレに

押し込められたと

思ったら…

電車に

乗ってるなんて…

これは…
夢??

私は夢を
見ているの??」

良太郎
「…あの

これは…
夢じゃなくて

…現実です

これは…
デンライナーと
いつて

時を越えて
過去や未来に行ける
タイムマシンの
ような電車です

僕は…
過去から来ました

他のみんなは

未来から来た
イマジンっていう

僕の仲間です

…紹介します

モモタロス
ウラタロス
キンタロス
リュウタロス

あの奥にるのが
ジーク

で…この人が
デンライナーで
働いてる風加さん」

風加

「こんにちは
コーヒーどうぞ」

かなえ

「ありがとう

ございま………？」

良太郎

「こ…このコーヒ―
見た目は変だけど…」

飲んでも

大丈夫ですよ

僕も…飲めるし
ズズ〜」

かなえ
「…はい」

オーナー
「そしてワタシが…
この電車の
オーナーです…」

かなえ
「キャー!!」

良太郎

「オーナー!!」

モモタロス

「おっさん!!」

てめえは

どつから

出てくんだよ!!

ビックリするじゃ

ねえか!!」

オーナー

「失礼」

良太郎君

その方は…」

良太郎

「かなえさんです

小田かなえさん…

ちよつと…

予想外の事が
起きたので

デンライナーに
連れてきて
しまいました」

オーナー

「良太郎君」

ワタシが

聞きたいのは」

彼女がチケットを
持っているか
どうかです

どんな予想外な事が
起きようと…

例外は」

認められません

ささあ」

チケットを

拝見いたします」

良太郎

「まってください
オーナー！！

実は…

アパートの

隣の部屋で爆弾が
爆発してしまつて…

こうでもしないと
爆発に巻き込まれて…

かなえさんは
死んでいました」

オーナー

「それは」

イマジンの
仕業ですか？

何度も

言つてるように

我々は、時の流れを
変えてはいけない

どんな理由が

あろうとも
どんな結果に
なろうとも
」

良太郎

「でも

あのままだと
アパートごと
粉々に……」

???

「アパートは
無事だ!!」

第二章…初めての再会…4

良太郎

「…侑斗!」

侑斗

「お前が

あの部屋に

放置した爆弾を

俺達が回収して

時の砂漠で

爆発させたんだ」

良太郎

「…さっきの爆発が
そうだったんだ…」

侑斗ありがとう」

侑斗

「野上

もっと冷静に
行動したらどうだ

お前は何年たつても
あぶなっかしいんだよ!!」

良太郎

「何年って

侑斗と最後に
別れてから

…ぼくの時間は

そんなに進んで
ないんだけど…」

侑斗

「勘違いするな!
大人になっても

お前は
どうしよもなく
ドジなんだよ」

良太郎

「…え？」

この運の悪さは
大人になっても
治らないの？」

侑斗

「病気じゃないんだ！
あきらめろ！」

お前の運の悪さは
死ぬまで続く」

良太郎

「ひえ」

どうしよう」

侑斗

「そんな事より
彼女を次の場面に
連れていくな

同じ時間に彼女が
2人いると
やっかいな
事になる

今すぐ
さっきの時間
もどすんだ!!」

良太郎

「でも…

イマジンが…」

侑斗

「イマジンの
行き先はわかってる

それに

お前の壊した壁も
今デネブが
直してるし

爆弾犯も
警察に捕まった

あの時間は

安全になった

彼女を

未来に連れて行って
時の運行を乱すな

何も知らないほうが
都合がいいんだよ」

オーナー

「良太郎」君

侑斗君の

言った通りです

彼女を元の時間に
もどすのは
当然のこと

未来に

連れて行く事は…

けっして

許可できません!!」

良太郎

「…わかりました

じゃ…

彼女を元の時間に
戻します

かなえさん…

ごめんなさい

こんな所まで

連れてきてしまつて…

実は未来で…」

オーナー

「良太郎君！！

彼女に何を話す
つもりですか？

彼女の人生は

彼女が決めること

第三者が…

決める事では
ありません

ましてや

私達のような

立場の人間が

他人の人生を
語ってはいけません」

良太郎

「…わかりました

かなえさん…

家まで送ります」

かなえ

「はい…

お願いします」

~~~~~

アパートの前

~~~~~

良太郎

「じゃ…」

かなえ

「…さよなら」

~~~~~

デンライナーの中

~~~~~

モモタロス

「落ち込むなよ」

良太郎「!!」

良太郎

「……………」

ウラタロス

「良太郎」

これであの子と

一生会えない

わけじゃないし」

すぐに

会えるんだから

元気だしなってゝ」

キンタロス

「泣くなゝ

良太郎ゝ

涙はこれで

拭いとけ！」

リュウタロス

「良太郎ゝ

大丈夫ゝ？

答えは

聞かないけど…」

（バシッ）

第二章…えにしんぐ」おーずー1

モモタロス

「聞いてやれよー!」

侑斗

「野上!!」

落ち込んでても
しょうがないだろ

さっさと気持ちを
切りかえろ!」

良太郎

「……だって」

侑斗

「……ったく!」

オーナー

「と〜と〜と〜で〜

侑斗君

あなたに
たのんでおいた

例の件は
どうなりました？」

侑斗

「あれは

やっと手がかりを
つかんだ

クライマックス
までには
間に合うと思う

まあ…

危ないから
使わないに
こしたこと
はないが…

念のために…

今から

向かうつもりだ」

オーナー

「そうですか

よろしく

お願いいたしましたよ」

では」

のちほど」

侑斗

「ああ…

じゃ～またあとで」

(ウィーン)

モモタロス

「なんだよ

おっさん!!

アイツに

何たのんだんだよ!!

まさかまた

いろんな時間の
良太郎を
連れてくのかよ!!」

オーナー

「いいえ」

あれは」

リスクが

大き過ぎます

だから侑斗君には
最終兵器…とでも
いいましょうか

それを搜してもらっ
事にしたんです

まあ…

クライマックスで

モモタロス君達が

がんばってくれば
使わずに
すむんですがねえ…」

モモタロス

「
…！」

まさか！！

幸太郎に

つながったのかよ？」

オーナー

「いいえ」

それはまだまだです

きつと…

今の良太郎君では

無理なのかも

知れませんかえ」

良太郎

「
…？」

何の話ですか？？」

モモタロス

「いいんだよ！！」

良太郎は良太郎の

出来ることを
やってりやゝ
いいんだよ！

気にすんなゝ！！」

良太郎

「でも…」

モモタロス

「そんな事より

良太郎！！

次がラストバトルに
なりそうだぜ！！」

良太郎

「え？

でも…爆弾犯の
イマジンがまだ…」

モモタロス

「コイツを

見て見るよ!!

こっちのカードが
爆弾の爆発の日

それに

こっちのカードが
宝石泥棒の日だ!!」

良太郎

「同じ日？」

ウラタロス

「…だね

たぶん…

罠だと思うけど

行かないわけにも
いかないしね」

オーナー

「きつと…

先ほどの
宝石泥棒の
時間とは

違う時が
流れているはずですよ……」

良太郎

「違う時が……？」

それじゃ……
僕1人じゃ……
無理かな……」

モモタロス

「心配すんなよ……！」

良太郎……！

言っただろ……！

ラストバトルだって……！！

ラストバトルには
全員で戦うつてのが
決まりなんだよ……！！

オーナー

「時の流れは
川の流れに似ている

同じ川のようにも
つねに水は流れ
変化している

まさに！

人生そのもの！！」

モモタロス

「お：おっさん
どっちむいて

しゃべってんだよ？」

第二章…えにしんぐーずー2

オーナー

「何度も

彼女のために

時間を渡り歩き

イマジンをおし

いつけん正常な

時の流れに戻した…

かのように見える

時間が流れています

がしかし…

本来の

彼女の人生では

出会はずのない

若い野上良太郎君と

出会ってしまった

この小さな出来事は

彼女の未来に

大きな

ヒズミを

うむかも
しれません！！

いや…！
うまないかも
しれません

選ぶのは彼女…

選ばれるのは
はたして
どの未来なのか…！！」

モモタロス
「…おっさん

だからよ…
誰に話しかけてんだよ

そつちに
なんかあんのか？」

オーナー
「良太郎君

もうすぐ橋に
つきます

準備は
よろしいですか？」

良太郎
「はい……」

モモタロス
「オッサン！！
俺様のことを
完全無視しやがったな！！」

ウラタロス
「まあまあ
先輩、落ち着いて
じゃ、良太郎
行こうか」

モモタロス

「ちょっとまって！！
カメ！！」

なんでてめえが
憑いていくんだよ！！」

ウラタロス

「だってこの橋で
かなえさんと会って
仲良くならないと
いけないわけだし

戦うだけなら
先輩でもいいけど

やっぱり
女性の事なら
僕にまかせてほしいなあ」

モモタロス

「…う
反論できねえ」

ウラタロス

「じゃ

行くよ良太郎」

~~~~~

橋の上

~~~~~

U良太郎

「ほお～らいた

かなえさ～ん！」

かなえ

「あつ…

あなたは

確か…

野上良太郎君…」

U良太郎

「くん…

まあ～いいか～

ちよつと調べて
ほしいことが
あるんだけど……」

かなえ
「その前に

先日は
ありがとう
ございました

アパートの
オーナーさんや
警察の方からも
話を聞きました

ほんとうに
爆弾犯が私の隣に
住んでいたんですね

壁もきれいに
直ってました

…あの電車には
おどろいたけど

… あんな世界が
あるなんて…

… たぶん誰に
話したって
信じてもらえない
だろうから

見た事は
誰にも言いません

だから…
安心して星に
帰ってくださいね」

U良太郎
「星？
… なにそれ？」

かなえ
「だって…
あの電車にいたのは
宇宙人ですよ？

地球人には
見えなかったし…」

U 良太郎

「…確かに

僕たちは

人間じゃないけど

宇宙人でもなくて

イマジン

なんだよねえ」

かなえ

「え？イマジン？

…良太郎君も
人間じゃないの？」

U 良太郎

「いや…良太郎は
人間だけど

良太郎に

憑いてるのが
イマジンで」

ええ」と…

《ウラタロス
僕と代わって》

…だね」

かなえ

「あれ？

メガネが…消えた」

第二章…えにしんぐーおーずー3

良太郎

「…これが普段の
僕なんだ…」

さっきのメガネのが
ウラタロスで

着流しを着てる時は
キンタロス

帽子をかぶった時は
リュウタロス

それから…」

くくくく

くくく

くく

く

M良太郎

「それから

このかつこいい

俺様が

モモタロスだ！！

《モモタロス！！

急に憑かないでよ《
」

かなえ

「他の方は

会ったような

気がするけど…

あなたは

会った事ないですね？

…はじめまして
」

M 良太郎

「はじめまして

…って

ちがうだろ！

電車でいたろ〜！

赤い鬼が俺様だ〜

こうやって軟弱な

良太郎に憑いて

一緒に戦ってんだよ

それに

俺様のおかげで
ねえちゃんは

交通事故を

おこさなくて
すんだんだぜ

感謝しろよ

《ちょつと

モモタロス

離れて！！》
「

）
）

かなえ

「え？

交通事故？

感謝？」

良太郎

「いや

気にしなくて
いいです

…あの

いや…
なんていうか…

悪いイメージが
かなえさんの
人生を狂わせていて…

いろんな事件の
犯人にされた
かなえさんの
間違った時間を

僕たちが
元の時間に
戻るように
戦ってきたんです…」

かなえ
「あの…
言ってる
意味がわかりません

私が…犯人？

私は警察に
捕まるような事を
したおぼえは

ありません

いい加減なこと
言わないで下さい」

良太郎

「他の事件は
解決しちゃったから
見せられないけど…」

解決してない事件は
後1つ…」

その紙袋の中に
いくつかの宝石が
入っているはずです

それが…」

この時間に
起きている事件です」

かなえ

「宝石…？
そんな物…」

…あ

何で…？

何でこんな物が…

私…

こんなの入れた
覚えなんです」

良太郎

「わかってます

…多分

あの店員が…」

女性店員

「そうよ～！

それは私が

入れたモノ

おとなしく…」

（ザザザザザ）

～～～

～～

～

プリンセス

イマジン

「…ワナにかかっていればいいものを！」

良太郎

「イマジン！」

《良太郎！
変身だ！！》

うん

変身！！」

くソードフォームく

ソードフォーム

「俺！ 参上！！」

やい！！

そこのピンク色！！

いいか！！

俺に前ふりはねえ
最初っから最後まで
クライマックスだ!!

女のイマジ
ンだからって

ようしやしねえから!!
覚悟決めとけよ!!

《モモタロス!!
先にかなえさんを
安全な場所に》

な...?
ガキじゃ
ねえんだからよ!!

よぉ!!
ねえちゃん
そこにいつと
ケガすんぞ!!

ちよつと離れてろ!!」

かなえ

「は…はい！」

E 男 A 男

「まちな！」

第二章…えにしんぐおーず 4

かなえ

「きゃー!!」

A男

「それは

俺たちの宝石だー!!」

E男

「返してもらっぜー!!」

ソードフォーム

「やい!! チンピラ!!」

そのねえちゃんに

手え出すな!!

たたっ切るぞ!

コノヤロー!!」

E男

「やれるもんなら」

（ザザザザ）

（（（（（

（（（

（

ソーライマジン

「やってみな!!」

A男

「お前の剣など…」

（ザザザザ）

（（（（（

（（（

（

ルナイマジン

「恐くも何ともない!!」

ソードフォーム

「出やがったな!!」

てめえらまとめて

たたっ切つてやる!!

待つてろよ!!

この女のイメージを
ぶった切ってから

オリヤ〜!!

…あれ？

いねえ!!

どこ行きやがった!!

…こうなったら

てめえらから

ぶった切ってやる!!

みてろ!!

(フルチャージ)

俺の必殺技!!

パート3!!

ソーラーイマジ

ン バカめ!!

忍法!! 影縛り!!

ソードフォーム
「オリヤ〜!!」

…ウガ!!

か…体が
うごかねえ!!

《…え?

あ…

影に釘みたいなのが
刺さってる!!

影縛り?…忍法?》

…忍法だか
忍たまだか
知らねえが…

ひきょうだぞてめえ!!

俺様は

ひきょうな野郎が
大嫌いなんだよ!!

くそ…

あの釘さえ…！！

《モモタロス！！

僕と代わる？

答えは

聞かないけど…！》

《…リュウタロス》

小僧！！代われ！！」

〃〃〃

〃〃

〃

〃ガンフォーム〃

〃

〃〃

〃〃〃

ガンフォーム

「バ…ン！！」

（バキューン）

（ペキーン）

ソーラーイマジン

「クソ！！
銃使いか！！」

ガンフォーム

「お前たち

…変な

ニオイがするよ？

やっていい？

…答えは聞かないけど…！」

（バンバンバン！！）

（ウィ〜〜ン）

（シュン〜シュン〜シュン〜）

ルナイマジン

「どこを狙ってる！！」

ガンフォーム

「あれ〜？

弾の軌道がかわる？

なんで？どうして？」

ルナイマジン

「答えを聞きたいか？」

ガンフォーム

「言いたいなら

勝手に言えば？」

ルナイマジン

「ガキが…」

ソーラーイマジン

「オレの名前は

ソーラーイマジン

オレの能力は

太陽だ！！

太陽の力を使い
影をあやつる事も
できる！！」

ルナイマジン

「オレの名前は
ルナイマジン

オレの能力は
月の力

地球とは違う
引力をあやつる！！

弾の軌道を
変える事ぐらい
簡単なことだ！！

こんな事もな！！」

（ウィーン）

ガンフォーム

「わ！！

ボクのガンが
浮き上がる」

わ

ボクの体も

浮く〜！

《浮く？

う〜く〜？

な〜く〜？

泣けるで！！

リュウタ！！

交代や！！

オレに任せとけ！！！！》

わかった！！」

第二章…えにしんぐおーず5

）
）
）

）
）

）

アックスフォーム

）

）
）

）
）
）

アックスフォーム

「このまま!!」

ダイナミック

チョップ!!

ドリャ〜!!」

（バリバリバリ〜!）

ルナイマジン

「グワァ〜!」

な…なんだコイツは!!

引力を

無視しやがった!!」

アックスフォーム
「引力？」

そんなもん
オレの底力には
勝てん！！

まちがない！！

（コキッ！！）

しかし…
お前ら2対1とは
ひきょうな
奴らやなあ！！」

ソーラーイマジン
「ひきょう？
…よく言われるぜ」

ルナイマジン
「でも
お前たちだって
コロコロ

入れ替わってん
じゃねえか！！

それは
ひきようじゃ
ねえのかよ！！」

アックスフォーム
「それは…

それはモモの字や
リュウタが
未熟なだけや！！

オレの強さは

泣けるで！！

ウォリヤー！！」

（ブーン！！
グサッ！！グサッ！！）

ルナイマジン
「グワァ〜！！」

ソーラーイマジン
「ソーラーソード!!」

(キン!!)

アックスフォーム
「ゲッ!!」

何やその剣は？
燃えとるやないか!!
しかも二刀流か!!

クソッ!!

《キンちゃん
代わるうか？

火消しなら…
僕に任せてほしいなあ》

よっしゃ
わかった!!」

〃

〃

〃

ロッドフォーム

〃

〃

〃

ロッドフォーム

「お前たち僕に釣られてみる？

お前たちが

光や引力を

あやつれるように

僕だって

こんな事も

出来るんだよね

それ！！」

(ドーン！

ザバーン！)

(ジュン…)

ソーラーイマジン

「クソッ！

水で炎が消えた！！」

ロッドフォーム

「ここはちょうど

橋の上だからね

下には水が

大量…だね

おとなしく

僕にやられてみる？」

ソーライマジン

「…フン！！」

この程度で

勝ったと思うなよ

あれを見る！！」

ロッドフォーム

「…ん？」

《あ！

…ウラタロス

あれは…爆弾犯だ》

じゃ…

爆弾犯にナイフを

突きつけられてる

男性は…？」

かなえ

「まことさん!!」

ロッドフォーム

「え？」

ひよつとして…」

《あの人

かなえさんの彼氏?》
「

かなえ

「まことさん!!」

ロッドフォーム

「ちよつと!!」

危ないから

かなえさんは

かくれてて!!

ここは僕に

任せてほしいなあゝ
必ず彼氏を
無傷で助けだして
あげるから」

かなえ
「お願いします」

ロッドフォーム
「お前たちの
目的は何？

その彼を少しでも
傷つけたら
ただじゃおかないよ！」

爆弾犯

「それ以上」

（ザザザザザ）

（（（（（

（（（

（

オーラムイマジン

「近づくな！！」

この男が
どうなつても
いいのか？」

第二章…ボス参上…1

ロッドフォーム

「おっ」と

わかったよ

近づかないから…

そのナイフ

海に流してみない？

《それはそれで
危ないよ…》

…だね

《カメ！！替われ！！》

え？

先輩…

ここは僕に

任せてほしいなあ…

説得なら僕のほうか…

《うるせえ！！！！

カメ！！さつさと

俺様と替われ！！》

ちよつと先輩

そんな強引に！！

わ！！！！

~~~~~

~~~~~

~~~~~

ソードフォーム

~~~~~

~~~~~

~~~~~

ソードフォーム

「やい！！

その金ピカ野郎！！

そのナイフは

飾りか？

てめえは！！

人を刺したこと

あんのかよ！！

刺すんなら

とつと刺したら

どうなんだよ！！

ああン？

てめえで
させねえんなら!!
俺様が手伝って
やつても
いいんだぜ!!

《モ…モモタロス
あまり敵の
イマジン
を
刺激しないほうが…》

《そうだよ先輩
かなえさんも
見ていることだし…

彼になんかあつたら
大変な事になるし…》

良太郎!!
あの男が
いなくなりや…

あのねえちゃんと
結婚しやすくなるん
じゃねえのかよ!!

《…え？

それは…

そうかも

しれないけど…

僕1人の

問題じゃないし…》

なら俺様が

決めてやる！！

見てろ！！

俺の必殺技

パート5！！」

（フルチャージャー）

かなえ

「え！？

止めて！！

逃げて〜

まことさん!!」

ソードフォーム

「ドリヤッ!

《やめてッ!!!

モモタロス!!!!」》

(バリバリバリ)

まこと

「わッ!!!!」

(ザザザザ)

~~~~

~~

~

(パシッ)

サターンイマジ

ン  
「お前ッ!!!

本気で切ろうと  
したのか?

それとも

こうなる事を  
知ってて……」

ソードフォーム

「あつたりめえだ  
バカやろー！！」

そいつの体から

砂のニオイが

プンプンしてんだよ！！

そんな事に

気付かないとでも  
思ったのかよ！！

《モモタロス……》

良太郎！

安心しろ！！

あの男は

あやつられてた  
だけだろうぜ！！

あのねえちゃんとの  
結婚なんて話も

あやしいもんだ!!

…だろ？

そこの黒いの!!」

サターンイマジン

「よくわかったなあ

この男は

何の記憶もない

その女を

だますために

長い間

体をかりていた」

ソードフォーム

「そんなこつたるうと思っただぜ!!」

かなえ

「そんな…」

(グツタリ)

ソードフォーム

「《あ……!!

かなえさんが》

チツ!!

おい! クマ!!

このねえちゃんを

デンライナーに連れてけ!!

それからカメ!!

オーナーのおっさんから

ベルトとパス

人数分かりてこい!!

ここから最後の

クライマックスだぜ!!

…それから

風加!!

お前は

デンライナーに残れ…」



## 第二章…ボス参上…2

〃〃〃〃〃〃〃

デンライナー

〃〃〃〃〃〃〃

風加

「なんで…！」

さつきは

よかつたじゃない…

私がいれば

楽勝だよ…」

〃〃〃〃〃〃〃

橋の上

〃〃〃〃〃〃〃

ソードフォーム

「バカやろ…」

独りじゃ

変身できねえ奴が

生意気言っんじやねえ！

お前はそこで  
そのねえちゃんを  
守ってりや  
いいんだよ！」

ウラタロス

「先輩」  
借りてきたよ

はい  
ベルトとパス」

ソードフォーム  
「お」

じゃ」  
良太郎」

おめえは  
ライナーフォームで  
戦えるよな？」

」  
」  
」  
」

プラットフォーム

「わかった

じゃみんな

いくよ

変身！」

）

）

）

ライナ）フォーム

モモタロス

「変身！」

）

）

）

ソードフォーム

「俺！参上！！」

ウラタロス

「変身」

）

）

）

ロッドフォーム

「お前」僕に  
釣られてみる？」

キンタロス

「変身！」

）

）

）

アックスフォーム

「オレの強さに

お前が泣いた！！」

リュウタロス

「行くよ」変身！」

）

）

）

ガンフォーム

「お前倒すけど

いいよね？」

答えは聞かないけど」

ジーク

「変身」

「」

「」

「」

ウイングフォーム

「降臨」満を持して…

どうしてもよいが…

このままでは

4対6…

力に差がありすぎる

お供の者ども

さがっておれ！！

ここは私だけで

じゅうぶんだ」

ソードフォーム

「誰がお供だ！！」

この野郎！

それに奴らは…  
4匹じゃねえよ!!

おい!!

おめえら!!

隠れてても

臭うんだよ!!

とつと

出てきやがれ!!

ファイヤー

イマジン

「バカのわりには  
鼻がきくんだな！」

ウォーター

イマジン

「今度は同じ手は  
きかねえぜ！」

ウッド

イマジン

「これで

7 対 6

けいせい逆転だなあ」

ロッドフォーム

「あれ？」

あいつ……」

ガンフォーム

「あれ？」

やつつけたのに、  
なんで？」

ソードフォーム

「どんな手を

使ったか

しらねえが……！！

何度でも

切り刻んで

やつからよ

覚悟しとけ……！！

てめえら

火と水と木の  
イマジンだよな？」

ウラタロス

「で…

こっちが

太陽と月…

となると

のこるは…」

キンタロス

「金色は金

黒いのは…」

サターンイマジン

「私の名は

サターン」

ソードフォーム

「サターン？

悪魔…って意味かよ？

…お前が親玉か！！」

ウラタロス

「先輩」

それはサタン

そいつはサターン

土って意味だと思うよ  
「

リュウタロス

「つまり」

月火水木金土日

1週間」

お前…

休みだけどいい？」

## 第二章…ボス参上ㄿ3

ソーラーイマジン

「うるさいぞお前!!」

日曜日だからって

休んでない

企業もあるだろうが!!

太陽のように

オレは休まず

燃えて戦えるだよ!!」

アックスフォーム

「企業戦士

ってやつやなあゝ

がんばれよゝ」

(コキッ)

ロッドフォーム

「キンちゃん

敵をほめてる

場合じゃないって

…それはさておき

とりあえず

場所かえようか？

ここじゃ

戦いにくいしね」

~~~~~

デンライナー

~~~~~

風加

「いらっしゃいませ」

ようこそ

デンライナーへ

どうぞお

好きな場所に

お座り下さい

そちらの窓からだと

良太郎さんたちの

戦いがよく見れますよ」

かなえ

「……え？」

…電車が

空を飛んでる!!」

風加

「はい

デンライナー  
ですから」

かなえ

「え？」

オーナー

「時の列車

デンライナー

チケットさえあれば  
過去でも未来でも

好きな時代に

飛んで行ける

デンライナーは

そんな未来の

乗り物です

空を飛ぶぐらい

ごく普通の  
走行ですよ」

かなえ

「じゃあの人  
も未来から……」

オーナー

「いいえ

良太郎君だけは……」

過去からの  
乗客ですね

彼は……本来

とてつもなく

一般的な想像を

はるかに超えた

最強最悪の

運の悪さの

持ち主ですが…

出会って…

しまったんですね…

彼らに…

あのイマジン達は

良太郎君の

やさしさと

勇気と

根性に引かれ

昔から仲間で

あったかのように

共に戦い

はげまし合い

時には

ケンカなどをして

強いキツナで

結ばれた

最強のチーム…

とでも

いいでしょうか

まるで…

それは

家族…

のようなものかもしれないね」

かなえ

「家族…」

風加

「家族…？」

だったら…

オーナーは

…おじいちゃん？」

オーナー

「……………！！」

風加

「ごめんなさい」

かなえ

「あの…」

彼はなぜ

あんな格好で

戦ってるんですか？」

オーナー

「彼は今…」

あなたの為に

戦っていると

言っているでしょう

彼は特異点…

つまりは  
仮面ライダー電王になるべくして  
なった人物

彼の心の半分は  
強い正義感と

半分は  
誰にも負けない  
やさしさで  
出来ている

これまでも  
いくども  
他人のために  
戦ってきました

彼はきつと  
みんなの  
ヒーローに  
なるべくして  
生まれてきたのかも  
しれませんね」

かなえ  
「ヒーロー……？」

でも…

負けてる気が  
しますよ？」

オーナー

「あららら…

これは…

いけませんね」

風加君！！

…コーヒー2つ」

## 第二章…ボス参上…4

~~~~~  
いつもの廃棄
~~~~~

ソードフォーム  
「クソ!!」

なんだこの黒いの!!

斬っても斬っても  
土から復活して  
きやがる!!」

ロッドフォーム  
「水だから  
こんな乾いた  
土地だと

戦いにくいと  
思ったのに…

まったく…

つれないね  
お前！」

アックスフォーム

「この金色

メッキかと思たら

本物の

ゴールドやな！

オノが

くだけそうや！

間違い無い！」

(コキッ)

ガンフォーム

「この木じゃまゝ

なんでゝ

次から次に

はえてくるの？」

ウイングフォーム

「なぜ私が…」

火と太陽を相手に  
せねばいかんだ！！

あゝ熱い！！熱い！！

このままでは

白い肌が

こげてしまう  
ではないか！！

ダンドリーチキンに  
なりたくは  
無いぞ！！」

ライナーフォーム

「みんな…  
がんばって…」

みんなが…  
力を合わせれば…

き…きつと  
勝てるからあ…」

ソードフォーム

「良太郎!!」

おめえが一番

やられてんだよ!!

なに地面に

へばりついてんだよ!!

シャンとしろ

シャンと!!」

ライナーフォーム

「だって…

か…体が…

重くて…

動けないよ…

助けて…」

ソードフォーム

「バカやる!!」

弱音はくんじゃねえ!!!

自分でなんとかしろ!!」

ライナーフォーム

「そんな…」

(ダダダダア〜!!!)

ルナイマジン

「グア!!」

だ…誰だ!!」

デネブ

「の〜が〜み〜」

助けに来たぞお〜!

しっかりしろ!!

野上!!

キズは浅いぞ！！」

ライナーフォーム

「キズ

ついてないけどね」

デネブ

「え…？」

そうなの？

…どおりで」

ライナーフォーム

「このイマジンは

重力をあやつる

みたいだから…

気をつけて」

デネブ

「わかった！

後は私にまかせて！

おい！お前！！

：

はじめまして

デネブです

あっどうも

あの…お名前  
うかがっても

よろしいでしょうか？」

ルナイマジン

「…なんだおまえ？  
オレはルナイマジン

月のもつ能力が  
使えるんだよ  
オレ様は！！」

デネブ

「えゝ！！

これは奇遇だあゝ

ワタシはデネブ

ほら夏の空に

彦星と織り姫と

ワタシで…

夏の大三角形って

呼ばれてるゝ

いやゝ

同じ星の仲間みたいなものですねゝ

いやゝ

親近感わくなあ…」

侑斗

「デネブ!!」

お前なにやってんだ!!

いくぞ!!

変身!!」

ゝゝゝ

ゝゝ

ゝ

ゼロフォーム

デネブ

「じゃ〜わたしも」

〜

〜

〜

デネビツクバスター

「最初に言っておく！！

侑斗の

この赤いフォームは

ゼロフォームだ〜！！

アルタイルフォーム

とは言わない」

## 第二章…ボス参上ㄿ5

ゼロフォーム

「バカ…

いまさら

何言ってんだよ!!」

デネビックバスター

「だって」

説明しとかないと

侑斗は勘違い

されやすいし…」

ゼロフォーム

「どうでもいいんだよ!!  
そんな事!!

それより

野上!!

お前には

このイマジンは  
無理だ！！

ジークを手伝え！！」

ライナーフォーム

「わ…わかった  
まかせるよ」

ゼロフォーム

「いくぞ！」

ルナイマジン

「誰が相手でも  
同じことだ！

それ！！」

（ズーン）

ゼロフォーム

「あまいな！！」

おれは元々  
身が軽いんだよ

「ウォーリャー!!」

(ダダダダダ)

ルナイマジ

「グアー!!」

クソッ!!

身が軽いなら!!

これでどうだ!!

(ファッ)

それッ!

月まで

飛んでいけ!!」

ゼロフォーム

「ウアッ!

体が浮いていく」

デネビツクバスター

「侑斗」！

大変だ」！

どうしよう」

「…そうだ！」！

」

」

」

デネブ

「…やっぱり

連れてこよう」

ゼロフォーム

「ウアア」

どうなってるんだ」！

…ン？

なんだ？

あんな所に

イマジンが

2体かくれてる！

野上！！気をつける！！

あのビルの屋上に  
イマジンが  
2体いるぞ!!」

ライナーフォーム  
「え〜!  
7体だけでも  
苦勞してるのに…

…なんで  
かくれてるの?」

ゼロフォーム  
「おれに  
わかるわけないだろ!!」

ソードフォーム  
「どのビルだ!!」

俺様が  
あぶりだしてやる!!

(フルチャ〜ジ)

俺の必殺技

パート2!!!

オリヤ!!」

(バリバリバリ〜!)

ガンフォーム

「ボクも撃つても  
いいよね？」

答えは聞かないけど

(フルチャ〜ジ)

いけ!!」

(ゴォー

ドキュ〜ン!!)

(ドカン!!)

(バラバラバラ!!)

????

「チエツ

見つかるのハヤ!!」

プリンセス  
イマジン  
「どうされます？  
ランド様」

ランド  
「見つかった  
らしいがない

あいさつだけでも  
してあげようか？」

ソードフォーム  
「あ！！  
消えた女の  
イマジンだ！！

あのおまゝ！！！！  
あんなところに  
いやがった

勝手に消えるな！！  
この野郎！！！！」

プリンセス

イマジン

「へエ〜？

ここじゃ消えるのに

お前の許可が

必要なのかい？

赤い坊や〜」

ソードフォーム

「赤い坊やつて

呼ぶな！！

俺様は

うどんじゃねえぞ！！

そっちの

小さい奴の方が

あきらかに

坊やだろぅが！！」

ランド

「だ…

だまれだまれ！！

私は坊やでわない！！

我が名はランド

ランド王国の

プリンスだ！！」

プリンセス

イマジン

「ランド様の

御前である

皆の者！！！

頭が高い！！」

## 第二章…苦戦〜1

敵イマジン

「ははあゝ!!」

ソードフォーム

「ははあゝ!!」

ロッドフォーム

「ちよつと先輩!!」

先輩はしなくて  
いいってば!!」

ソードフォーム

「え? そうなの?

ハハハハ…

…おい! クマ!!

お前ゝ

言われてるぜえゝ

頭がデカいつてよ」

アックスフォーム

「アホゝ！」

アイツは

ずが高い

ちゅうたんや」

ソードフォーム

「そゝ

そんな事

どうでもいいんだよ！！

おい！！

そのイカみたいな

女のイマジンよ！

悪いが俺たちは

そのちっこいのに

ひれふすつもりは

ねえぜ!!」

プリンセス

イマジン

「イ…イカ…!!」

無礼な!!

私の名は  
プリンセス

お前たちも

イマジンならば

我が王国の  
一員ではないか!!」

ソードフォーム

「バカ野郎!!」

俺たちは

カイに付いて

この世界に  
来たんだよ!!

お前たちの

事なんか知るか!!」

ランド

「…カイか

ヤツも

ランド王国の  
プリンスだ

他にもブーツと  
いう者もいる

カイ…ブーツ…

そして私が

ランド王国の  
プリンスだ！！」

ロッドフォーム

「それって…

ギリギリ…

…だね」

アックスフォーム

「アホやなあ…

カイもブーツも  
もうおらん!!」

(コキッ)

ランド

「なに？」

なぜだ!!

…そうか

しばらく連絡が  
ないと思っていたが…

まさか…

おまえ達の仕業か？」

ソードフォーム

「カイは俺たちが  
始末したぜ!!

ブーツは

俺様の子供達に  
やられたみたいだぜ!!」

ランド

「なに？」

子供ごときに？

なんということだ…

まあよい

手間が

はぶけたのかも  
しれん…

ライバルが消え

これでやっと

私がランド王国の  
王となれるわけだ」

ウイングフォーム

「何を

たわけたことを…

プリンスならば

ここにも

いるではないか！！

イマジンの王を  
決めるのであれば

私を差し置いて

出来よう

はずもない!!

どちらが王に  
ふさわしいか

1対1で

勝負しようでわないか!!」

ランド

「…そんな手下の  
イマジンに

苦戦している  
ようなヤツは

私の体にさえ

ふれる事は出来まい…

まあ…

せいぜい

がんばりたまえ

いや…までよ

…そうだ

よろこべ諸君！！

私はここにいる

私のダッシュ軍団の  
イマジンと戦い

勝った者に

私と戦う権利を  
あたえよう

ありがたく思え

私がじきじきに

きさまらの首を

はねてやろう！！」

ソードフォーム  
「なんだと！！

やい!!ちっこいの!!

だまって聞いてりや  
調子にのりやがって!!

そこでまってる!!

この土の野郎を

すぐに

たおしてやるからよ!!」

## 第二章…苦戦く2

サターンイマジン

「砂がほざくな！

私の力を甘く見るなよ」

（どどどどどど）

ソードフォーム

「わ！！

土の中に

溶け込みやがった！！

なんだコイツ！！

やい！！

モグラ野郎！！

どこ行きやがった！！

わあ！！

なんだこりゃく！！

じ…地面がへこむく…！！」

サターンイマジン

「モグラではない!!」

アリ地獄だ!!

それ!! それ!!

さっさと落ちてこい!!

このカマで

切り刻んでやる!!」

ソードフォーム

「わ!! バカ!!

砂をかけるな!!

ペツ!! ペツ!!

俺様は

アリじゃねえぞ!!

こんなレトロな

攻撃に俺様が…

やられる…

とでも…

オイ！！カメ助ける！！

ヤイ！！クマ助ける

コラ！！！！

小僧！！

助けて！！

ロッドフォーム

「先輩」

助けてあげたいのは  
山々だけど…

ちよつとこつちも  
いそがしいくてさあ

ごめんね

自力でよろしく」

ソードフォーム  
「自力だ？」

アックスフォーム  
「モモの字！！  
すまんな」

この金のかたまりが  
かけらも傷つかん！！

悪いけどー！！

自分で  
はい上がってくれ！！」

ソードフォーム  
「はい上がるにも  
砂がどんどん  
落ちて来るんだよー！」

ガンフォーム  
「じゃー！」

落ちればいいじゃん

イマジンの下に  
いるんだからさあ」

ソードフォーム

「このガキ」！

人ごとだと思つて  
のんきなこと  
言つてんじゃねえ」！

下に落ちたら

あのカマで  
八つ裂きじゃねえか」！！

ん？…さてよ？

こつちから  
落ちて行つて

この剣で先に  
ヤツをたたつ斬れば  
いいんだよなあ？

よっしゃ」！！  
そうと決まれば」！！

（フルチャージ）

俺の必殺技！！

パアツト行くぜ！！

オリヤッ！」

（ずずずずずず）

（グサッ！！）

サターンイマジン  
「グアッ！！」

…落ちて来るなら

おとなしく

落ちて来い！！

あゝビックリした」

ソードフォーム

「ビ…ビツクリ？」

俺様の攻撃をうけて

感想がそれだけか？」

サターンイマジン

「当たり前だ！！

お前の攻撃など

痛くも力ユくも無い！！」

ソードフォーム

「なんだと！！

ちゃんと

刺さってるんだぞ！！

どうなってるんだよ！！

コイツ斬られても

何も感じねえのかよ？」

~~~~~

そのころ…

ウラタロスは

~~~~~

ロッドフォーム

「ホントにコイツは

水を斬ってる感じ

…だね

お前たち

ただのイメージじゃ

無いよね？

太陽に近づいて

蒸発したと思ったら…

また復活するなんて…

まったく…

どうなってるんだろね？」

## 第二章…苦戦…3

ウォーター

イマジン

「おまえ達とは  
デキがちがう…」

ただそれだけの事だ

おまえの攻撃は  
カメよりのろい…

そんな釣り竿や  
キックで

俺様に勝てると  
本気で思っているのか？」

ロッドフォーム

「勝つさ〜！！」

負ける気がしないからね〜！

それにこの竿は…

ヤリにもなるんだよね!!

これで!!

どうだ!!」

(ビュン!!)

(バシャー)

ウオーター

イマジン

「おやおや…

残念だったな!

ヤリは体を  
通り抜けて  
行っちゃったぜ!!」

ロッドフォーム

「やれやれ…

のれんに腕押し

ぬかに釘…

水にヤリ…つてのも

新しいことわざになるかもね？」

ウォーター

イマジン

「お前の攻撃はそれまでか？」

なら…

こっちから行くぞ…！」

（バシャー…！！）

ロッドフォーム

「わ…！」

体中が水のマクにおおわれた…！！

…でも

先輩ならともかく…

僕は泳げるんですけどね…」

ウォーター

イマジン

「知ってるよ

そんなこと…

だが…

息つきせずに

何分たえられるかなあ？」

ロッドフォーム

「何？」

こんな水のマク…

こうして…

こうすれば…

…え？

ダメだ…

水のマクから

出られない

… ちょっと

やばいよこれは〜！  
」

〜  
〜  
〜  
〜  
〜

そのころ

キンタロスは  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

アックスフォーム

「お前の硬さに  
オノが泣いた…

OH〜！NO〜！！

あか〜ん

なんやこの金ピカ！！

ちよつとぐらい

キズついてても

ええやないか〜！！

… しゃない

外が硬いなら

中からの  
攻撃しかないなあ！！

（コキッ）

…お前

ほんまものの  
金なら…

重くて…

…泳がれへんやろ

…お前の価値は  
毎日変動して  
不安定やなあゝ！

…お前のような  
デカイズウタイでは

女の子の  
指輪にもなれん！！

持てないヤツは

モテへんでえゝ！

間違いない！！」

（コキッ）

オーラムイマジン

「お前…

さつきから

何を言っている？

…ひょっとして

外が傷つかないから

内側の…

心を傷つけようと  
してるのか？」

アックスフォーム

「おゝ！

ようわかったな！！

……あかんか

しゃくない

打つ手無し！！

間違いない！！」

（コキッ）

オーラムイマジシ

「残念だったなあ……

ならば……

こんなのは

どうかな？」

アックスフォーム

「……ん？」

何が……？

ん？なんやこれ？

あ……

オレの脚が金色に……

あ…あかん  
動けん！

お前なんて卑怯な…」

オーラムイマジン

「卑怯？

初耳だな」

喜べ

お前の体を

金でコーティング

してやってるんだよ

全身が金で

おおわれたら

お前はそれで  
終わりだ…」

## 第二章…苦戦〜4

アックスフォーム

「何い〜？終わり？  
なんでや？」

オーラムイマジン

「お前も息が

出来なくなるからさ…！」

アックスフォーム

「クッソォ〜！」

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

そのころ

リュウタロスは

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

ガンフォーム

「なんかやな感じ〜

お前ゝ

木なら木らしく

さつさと

倒されちゃいなよゝ」

（バキユン！

バキユン！

バキユン！）

ウツドイマジン

「ご期待にそえなくて  
悪いなゝ

代わりにお前が  
倒されてくれないか？」

ガンフォーム

「やだよおゝ

僕は 負けない

絶対倒れなゝい！！

…倒れなくて  
いいよね？

答えは聞かないけどー!!」

(バキューン！)

ウツドイマジン

「倒れなくていいさ…

立つたままで!!

これでもくらえ!!」

(どどどどど)

ガンフォーム

「え？何何何!!？」

わあ

木がはえてきたー!!  
わああ!!

いっぱいの…

木に

はさまれて…

身動きが…

できな～い…」

ウツドイマジン

「そのまま

木の一部に

なつてしまえ…！」

~~~~~

そのころ

ジークと良太郎は

~~~~~

ウイングフォーム

「このこのこの…！」

熱過ぎて手が

出せんではないか…！」

良太郎…！」

お前はその火を

消火するがよい…！」

私はこの太陽を  
相手に…

…！

あ…暑い…！

誰か！

サングラスと

日焼け止めを…！

誰か！誰か…！！

…誰もおらんのか？」

ソーラーイマジン

「残念だったな！

仲間なことごとく

やられちまったぜ…！！

後は

お前たち2人だけだ…！！

あきらめて

さっさと骨まで…

丸焼けになるがいい…！！」

ウィングフォーム

「どこの世界に

はいそうですかと

素直に丸焼けに

なるやつが…

いる…

ものか…

何か…やつの

弱点でもあれば…

あ…暑い

ア…ッ…

…もう

ダメだ…

誰…か…

日傘を…」

ソーラーイマジン  
「いっちょ上がりだな！」

ライナーフォーム  
「ジーク！  
しっかりして」

みんなあゝ

頑張つて！！

みんな…

…どうしょ

僕だけじゃ…」

ファイヤー  
イマジン  
「お前だじゃゝ  
ムリだよな！」

あきらめろ

さあゝ

終わりにしようか!!」

ライナーフォーム

「いやだ

僕…だけじゃ

ダメかも

知れないけど…

僕は…

あきらめない!!」

ファイヤー

イマジン

「ほおゝ

いせいだけは

いいみたいだがゝ

腰がひけてるぜ!!

坊や!!」

(ブオオオ〜!)

ライナーフォーム  
「ヒエ〜!!」

(ドーン!!)

ドカ〜ン!!)

ファイヤー  
イマジン  
「グア!!」

な…なんだ??

バ…バズーカ?

## 第二章…復活…1

コハナ

「良太郎！

しっかりしなさい！

あんたたちも！！

何やってんの！！」

良太郎

「コ…コハナ

…ちゃん？？」

…大きくなっただね」

ウイングフォーム

「ひ…め…？」

…暑さのせいかな

姫が…

二重に見える…」

コハナ

「ジーク！

何言ってるの！！

二重じゃないわよ！！」

ハナ

「ちゃんと

2人いるのよ！！

リュウタロス！！

あのプリンセスを  
撃てる？」

ガンフォーム

「ハナちゃん！！

わかった！！

ウツ…

ダメだ…

木の枝が

邪魔してて…

腕が動かない」

ハナ

「わかったわー!!」

(カチャ

ドーン!!

ドカン!!)

ガンフォーム

「わー!!!」

危ないな〜!!

でもこれで

右手が動くよ

あの女のイマジンを  
撃てばいいんだよね？

いくよー!!」

(バキュンバキュン  
バキュン!!)」

ハナ

「コハナちゃん

私たちも撃つわよー!!」

コハナ

「OK」

ハナ・コハナ

「ダブル!!」

バズーカー!!」

(ドドン!!)

プリンセス

イマジン

「ギャー!!!!」

ソードフォーム

「なんだ??」

あ!!

鼻くそ女が2人!!」

ハナ・コハナ

「誰が鼻くそよ!!」

ソードフォーム

「わ!!バカ!!」

バズーカーを

こっちに向けるな!!

あぶねえじゃねえか!!

そ…それより

なんで

あの女イマジンを

攻撃してんだよ!!」

ハナ

「バカモモ!!」

そんな事も

わからないの？

あのイマジンは

プリンセス

つまり姫なのよ!!」

ソードフォーム

「そ…それぐらい  
知ってる！」

その姫が

どうしたんだよ？」

ハナ

「まだわかんないの？」

姫っていうのは

治癒の能力があるって

相場が

決まってるのよ!!」

ソードフォーム

「ちゅ？」

「なんだそりゃ？」

ハナ

「ケガやキズを  
治す能力

つまり

そのイマジン達は

不死身なんかじゃ  
なくて

ケガしたところを

あの姫が  
すぐに治してるから

不死身のように思うだけ

見て！

あの両手から

出ている光の帯が

イマジン達と

つながってるでしょ

あの光の帯を切れば

治癒の力は届かない

あれさえなければ

そのイマジン達を

倒せるわ」

ソードフォーム

「なるほどなあ〜！

ど〜せ

そんなこつたろうと  
思ったぜ！！

よっしゃ！！

あの光の帯を斬りや  
いいんだよなあ〜？

（フルチャ〜ジ）

行くぜ！！

俺様の必殺技

パート4!!

フルバージョンだ!!

ドリャー!!」

(ブンブンブンブンブンブンブンブン!!)

## 第二章…復活…2

プリンセス

イマジン

「ギャー！！」

…おのれ！

よくも見破ったわね！！

…でも

もう遅い！！

青と黄色と白いのが

死にかけてるよ

さあて

どうする？

そっちの姫は

治癒の能力

…あるのかしら？」

ソードフォーム  
「バカやる」！

チュだかチュの

能力だからねえが

コイツに

そんな力は  
ねえんだよ！！

…でもなあ

こいつは

みんなを元気にする

能力は持ってたんだよ！！

どりゃー！！」

（ブン！！）

（グサッ！！）

プリンセス  
イマジン

「ギャア〜！」

ライナーフォーム

「…モモタロス

それも…

治癒の能力だよ」

ソードフォーム

「え？ そうなの？

そ…それを早く言えよ〜

お…俺様は

よ…横文字は

苦手なんだよ…！！」

ロッドフォーム

「先輩〜！

治癒は…日本語…

…だね

そ…そんなことより…

た…助…けて…」

アックスフォーム

「モモの字…！」

は…早よしてくれ…！！

も…う…

は…鼻の穴しか  
あいとらん…！！

泣けるで…！！

…？

…あ…あかん

首も動かん…！！」

ソードフォーム

「カメ！！クマ！！  
待ってるよ！！」

今から俺様の  
必殺技で！！」

ハナ

「良太郎！！」

変身して！！」

ライナーフォーム

「え？

僕…変身してるけど？」

ソードフォーム

「良太郎！

そこで

鼻くそ女と

見学でもしてなあゝ！

今から俺様の必殺技

パート6で一氣に

カメ達を

助け出して

やるからよ!!

いくぜ!!

俺様の必殺技

パート6!!

オリヤ!!」

(ブン!ガン!

ブン!!キーン!!

ブーン!!ス…)

オーラムイマジン

「無駄なことを…」

ウォーター

イマジン

「甘いな…」

ガンフォーム

「モモタロスの  
ヘタクソォ」

早くこの木から  
出してよー！！」

ソードフォーム

「うるせえぞ！！

ハナタレ小僧！！

今やってんだろーが！！

もうちょっと

おとなしく待ってる！！」

ハナ

「バカモモ！！

もっと

簡単な方法が  
あるでしょ！！

良太郎！！

いいから早く

変身して！！

…クライマックス  
フォームに！！」

ライナーフォーム  
「え？

…あつ！

そうか！！

…いくよみんな！！

変身！！」

…クライマックス  
フォーム」

ウラタロス

「…あ！！これは」

キンタロス

「…お!!」

抜けた抜けた!!

抜けよった!!」

リュウタロス

「…やった!!」

さすがハナちゃん!!

頭いい!!

…誰かと違って」

クライマックス

フォーム

「俺!! 参上!!」

…おい小僧!!

それは俺様の事を言ってるのかよ!!」

## 第二章…復活…3

コハナ

「あんたしか  
いないでしょー!!」

(バコッ!)

クライマックス

フォーム

「グアッッ!

お…まえ

そ…こは…

《そうだ〜

そうだ〜

ワイ〜!ワイ〜!》

こ…コラッッ!!

暴れるな!!

《でも先輩が

攻撃せずに  
変身してれば…

僕たちは  
あんなに  
苦しまずに  
すんだのは  
確か…だね》

なにうおー！！

《セヤ！！  
モモの字！！  
お前の判断ミスや！！

間違い無い！！  
（ツン！）

イテッ！！  
突くな！バカクマ！！

《とりあえずこれで  
みんな助かつ…て

あ！！…侑斗は？》

大丈夫だ良太郎！！

オデブがちゃんと  
助けてるぜ！！

《良かった…

これでみんな…

…あれ？

…なんか

忘れてるような…》」

全員

「なんか…？

ん

ん？

んー！」

ジーク

「…わたしを…」

全員

「ジーク!!」

コハナ

「なにやってるの!!」

早く来なさい!!」

クライマックス

フォーム

「《コハナちゃん  
来いって言うても…  
スペースが…》

《そうそう

良太郎の言う通り

もう入る

スペースが

無いから無理

…だね」

《なんなら」

モモの字の

顔と入れ替えるか？》

《それがいい」！

モモタロスの

答えは聞いてない！！》

聞け！！

顔が替えられる

わけねえだろうが！！

でもよ」

このまま…って

わけにも

いかねえよなあ」

ハナ

「あるじゃない」

クライマックス

フォーム

「え？

ねえよ」

…ケツなら

あいてるけどよ」！」

ハナ

「違うわよ！

ここが

あいてるでしょう！」！」

（バシッ！！）

クライマックス

フォーム

「イテッ！！

せ…背中…？！」

ジーク

「そこへっ！」

くくくく  
くくく  
くくく  
くく

クライマックス  
フォーム

「《降臨》！  
満を持して！！《

ちよつとまでく！！

俺様はまだ  
許可してねえぞく！！

《姫》  
お心遣い  
感謝いたします《

話し聞け！！

コラく！  
テバヤロく！

背中  
パタパタすんじゃねえく！

《みなのもの  
苦しゅうない！！

わたしのおかげで  
空を飛ぶことが  
出来るようになった

感謝するがよい》

バカやろー！

てめえが増えて  
せまくて苦しいんだよ！！

つたくゝ何だよ！

このビラビラはゝ！

羽は羽でも

蝶々みてえじゃ  
ねえかよ！！

蝶クライマックス  
フォーム…！！

しまらねえゝ！  
」

ハナ

「蝶じゃないでしょ!!」

超クライマックス  
フォームでしょ!!」

## 第二章…復活…4

超クライマックス

フォーム

「ん…？」

なんだか

わかんねえが…

とりあえず…

全員復活だ…！！

超クライマックス  
フォームで

俺！！ 参上…！

やい！！てめえら！

待たせたなあ…！！

こっからが本当の  
クライマックスだぜ…！！」

ランド

「おろかな…

9対2？

おんなこども…

黒いのを入れても

そちらは5人…

イマジンが集合したとはいえ…

…おまえ達に  
勝ち目は無い」

超クライマックス  
フォーム

「不死身じゃねえ  
おめえたちなら

この俺様1人で  
十分だけだよ」

俺様の相手は  
ボスのおめえだ！！

あとのザコは…

侑斗!!

お前にくれてやる

煮るなり焼くなり

《釣るなり》

《まくなり》

《踊るなり》

《唐揚げにするなり》

好きにしろ

…って揚げて  
どうすんだよ?

《…侑斗大丈夫?》  
「

ゼロフォーム

「心配するなよ

良太郎！

こんな時のために

2人をよんだんだよ」

超クライマックス

フォーム

「W鼻クソを？」

ハナ

「誰が鼻クソよー！！」

（バコンー！！）

コハナ

「その呼び方

やめなさいー！！」

（ボコッ）

超クライマックス  
フォーム

「《イタイ！！》

姫～！！

私の羽を蹴るでない！！》

《コハナちゃん！！

そこは～

ボクの顔～！！》

…俺様は痛くも  
なんともない

こんな時

便利なフォームだよなあ～

《ハナ！！

顔をもいだれ！！

遠慮はいらん！！》

《顔はオデブちゃん  
でも大丈夫…だね》

…バカやるゝ！

オデブにこんな

たいやく

つとまらねえよ！！

俺様の顔は飾りじゃねえぞ！！」

コハナ

「顔で攻撃

出来たっけ…？」

ハナ

「出来ない出来ない

頭もいで川にでも  
流したら

洗濯中の

おばあちゃんが

きつと

ひろってくれるわよ」

超クライマックス

フォーム

「て…てめえら…！」

俺様の顔を

何だと思つてんだよ…！」

ハナ・コハナ

「桃でしょ…！」

超クライマックス  
フォーム

「なにを…！」

《ちよつと》

みんなあゝ

こんな時には

ケンカしないでよあゝ

…ところで侑斗

ハナさんたちを

よんだのはなぜ…？》

ゼロフォーム

「この2人にも  
戦ってもらおう」

超クライマックス  
フォーム

「《えゝ！  
無茶だよゝ》」

ハナ

「大丈夫よ良太郎！

私たちには…  
これが有るから」

（ジャーン！！）

超クライマックス  
フォーム

「《それって…  
侑斗と同じベルト…

そ…そんなことしたら

ハナさんたちの  
記憶が…》  
「

コハナ

「大丈夫だよ  
良太郎

私たちの  
使うカードは

これ!!」

## 第二章…変身！…1

超クライマックス

フォーム

「おい！

なんだよ

そのピンクのカードは？

ま…まさか…！

…おまえ達は

そのカードを

使うたび…

女らしさが

消えていく

…って事か…？」

ハナ・コハナ

「んなつ…！

わけないでしょ…！」

（ビシッ…！バシッ…！）

超クライマックス  
フォーム

「痛てゝ！！」

おまえら…

シッペはねえだろ！！

シッペは！！

《なるほどゝ

僕達のパーツ以外は

先輩のパーツだから

痛いのは先輩のみ

やるねゝハナちゃん》

《ところでハナ

そのカードは

誰からもろたんや？》

《答えは聞か…

…やっぱり聞いとこ〜》

ま…まさか  
あの桜井侑斗か？」

ハナ  
「まさか…あの  
つて何よ？」

要注意人物  
みたいな言い方  
しないでくれる！！

私のお父さん  
なんだから

カードぐらい  
もらったって  
いいじゃない！！

でもね  
このカードは  
お父さんから  
じゃないわよ」

超クライマックス

フォーム

「じゃ」

誰からもらったんだよ?!」

ハナ

「もらったんじゃないわ

買ったのよ

コンビニで

超クライマックス

フォーム

「なに」

コンビニ?!」

ハナ

「未来じゃ

この程度の

カードなら

コンビニで

買えるのよ

1回使い切り

イマジン不要

フォームの

デザイン自由

副作用なし

まあゝ

プリペイドカード

みたいなものね

いいでしょゝ

コハナ

「いいでしょゝ」

超クライマックス  
フォーム

「イマジン不要  
つてのは

気にいらねえが

ネコの手も借りてえ  
状態だ！！

さつさと

変身してみろよ！！」

ハナ

「何よ！

そのえらそうな態度は！！

…まあいいわ

見てなさい

いくわよ

コハナちゃん！！」

コハナ

「OK」

ハナ・コハナ

「変身！！」

〜リリー

ファルコン

フォーム

(ワンワンワンワン)

(キャンキャンキャンキャン)

超クライマックス

フォーム

「な…なんだ？」

Hリリー

ファルコン

フォーム

「最初に言っておくわよ!!」

私たちは

か〜な〜り強い!!」

デネブ

「ついでに  
言っておく!!」

お目々の所は  
ワンちゃんだ!!」

超クライマックス  
フォーム

「うるせえ! オデブ!

見りゃわかんだろうが  
見りゃ」

どう見たって  
犬だよ犬!!

《…だね》

《ワンワンゆうとっ たしなあ》

《コハナちゃんのは  
キャンキャンだったし》

《決めゼリフは

親ゆずりであろう

どこかの…

参上よりはましだが

私の降臨でもよかったかもしれん

なんだと！

手羽野郎！！

ひとの背中

借りという

なんだ

その言い方は！！」

## 第二章…変身！…2

デネブ

「みんな〜！！

仲たがいしている

場合ではない！！」

超クライマックス  
フォーム

「《そうだよ

モモタロスも  
ジークも

ここでケンカしないで》

良太郎は黙ってろ〜！！

元はと言えば

良太郎が

弱え〜から！！

こんな大所帯に  
なっちまったんじゃ  
ねえか！！

ちつとは反省しろ！！

《「…ごめん」

《まあまあゝ

先輩もそんなに  
怒らないで》

《ただでさえ

せまいんやから  
暴れるな！！》

（チクツ）

痛て！！

《早く敵を

たおそうよゝ！

ボクが一番に

たおしてもいいよね？

答えは聞かないけどゝ》  
「

デネブ

「み…みんな!!」

は…話を…

んん…

しょうがないなあ」

(バァン!!)

超クライマックス

フォーム

「わ!!」

危ねえじゃあねえか

オデブ!!」

デネブ

「やっと静かになった」

ではあらためて!!

ウォホン!!

最初に説明しておく!!

アルタイル

ベガ

デネブで

夏の  
大三角形と  
いうように

この  
フォー  
ムは

おお  
いぬ  
座の  
シリ  
ウス

こい  
ぬ座  
の  
プロ  
キオン

それと

オリ  
オン  
座の  
ベテ  
ルギ  
ウス  
で

冬の  
大三角  
形とい  
う!!

ちなみに〜

シリウスと

プロキオンと

ふたご座の

ポルツクスと

カストル

ぎょしゃ座の

カペラ

おうし座の

アルデバラン

オリオン座の

リゲルで

冬のダイヤモンド  
ともいう！！」

超クライマックス

フォーム

「

…だからなんだよ？

《先輩》

ハナさんと侑斗は

親子だから

夏と冬の

三角形つながりだと

言いたいんじゃないかなあゝ？》

ないかなあゝ？》

だったらよゝ

シリウスフォーム  
とか

プロキオンフォーム  
でいいんじゃないか？

なんだよその

リリーファルコン  
フォームって  
長つたらしい  
名前はよおゝ

《ファルコンっちゅうのは  
白い龍みたいなの  
奴やなあゝ

龍ならリュウタと  
かぶつとる《

《えゝ

そんなのやだゝ！！《

白と紫の違いが

あんだから

いいんじゃないかゝ？

でもゝ

リリーってのは

なんなんだよ？」

Hリリー

ファルコン

フォーム

「龍じゃないわよゝ！！

ファルコンは

夢がいつぱい詰まった

想像上の動物よ！！

それからリリーは

私たちは

女の子なんだから

白いユリの花のように

可愛いつて意味よ

…なんか文句ある？」

（バン！）

超クライマックス

フォーム

「…いえ

特には…

何もありません…」

ハリリ

ファルコン

フォーム

「だったら

あんたは

ボスを倒すんでしょ！！

サッサと行きなさい

ザコは私達が  
引き受けるから!!

行くわよ  
コハナちゃん

Kリリー  
ファルコン  
フォーム  
「OK!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1585h/>

---

仮面ライダー電王～外電2

2011年11月29日12時49分発行